

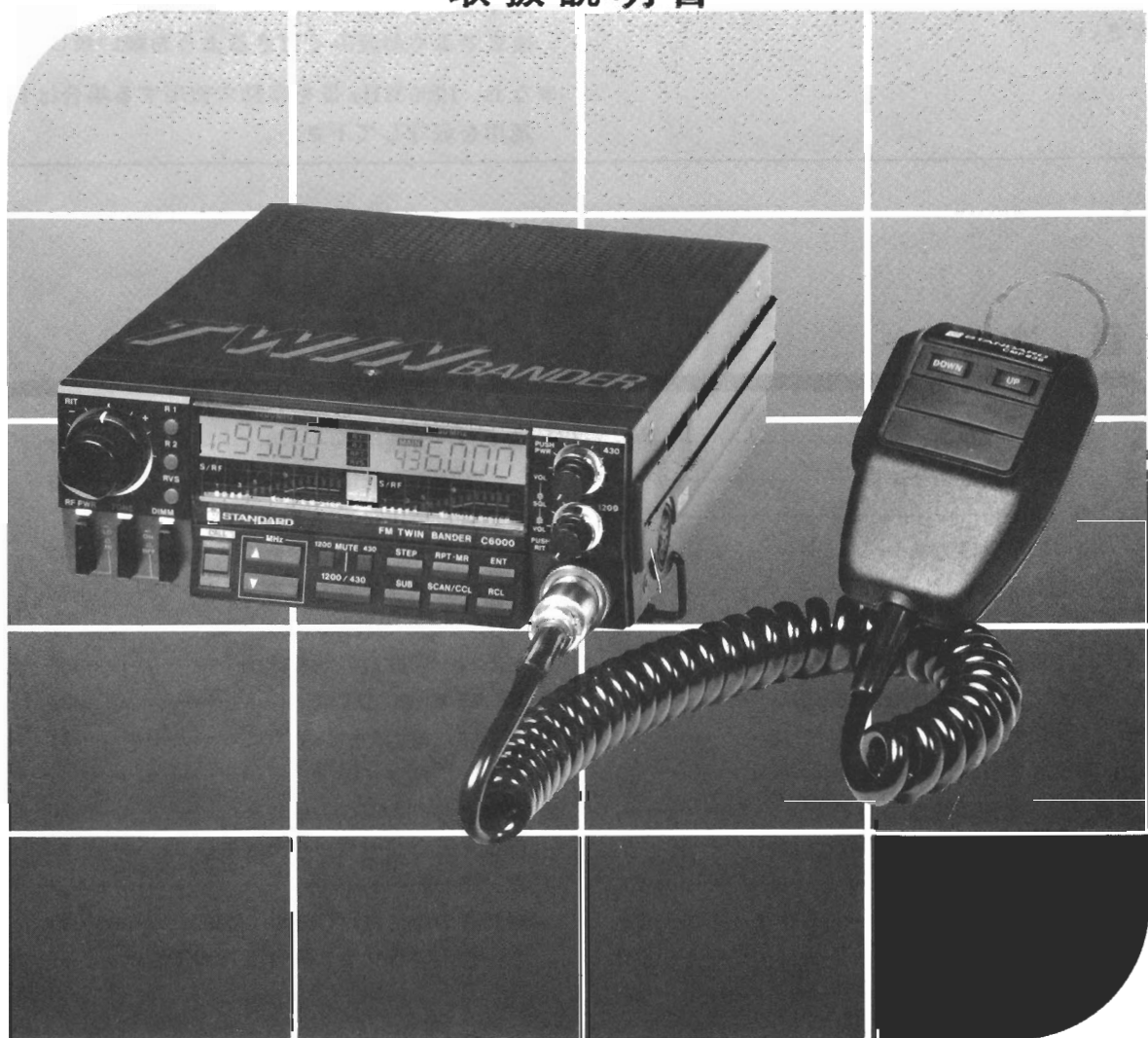
通信機は **入979"-ド**



TWIN BANDER

C6000/C6000S

取扱説明書



日本マランツ株式会社

TWIN BANDER

C6000/C6000S

このたびは、430MHz・1200MHz FMツインバンドトランシーバーをお買い上げいただきまして誠にありがとうございます。

本機は、当社の厳重な品質管理及び検査のもとに生産、出荷されておりますが、万一ご不審な点、お気付きの点などがありましたら、なるべくお早目にお買い上げいただいた販売店あるいは弊社営業所、サービスセンターへお申し付けください。

この取扱説明書は、10Wモデル・C6000及び430MHz帯のみ25WモデルのC6000Sを共通説明していますが、内容に相違がある部分については、説明を併記しましたのでご注意ください。

なお、C6000Sをご使用になる場合は第2級アマチュア無線技士以上の資格と、10W以上の局免許が必要です。

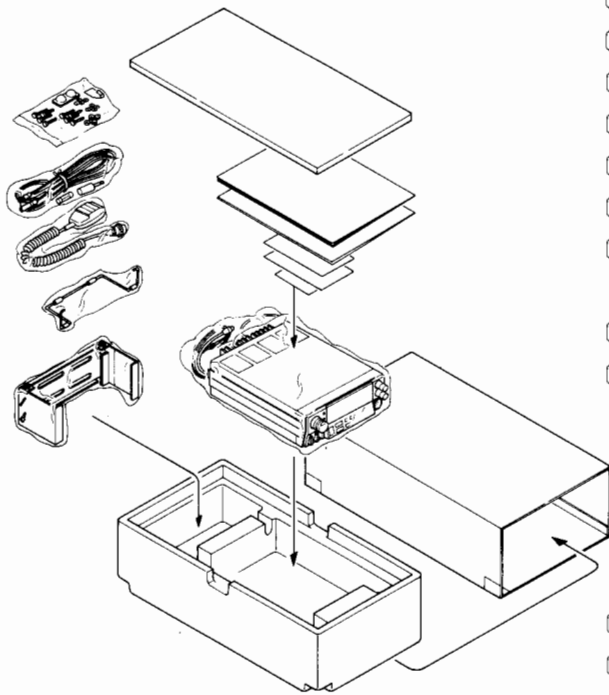
本機の性能を十分に発揮し、末永くご愛用いただくためにご使用の前に、この取扱説明書を最後までよくお読みくださるようお願い致します。

※なお、1200MHz帯を移動で使用する場合は1W運用を厳守して下さい。

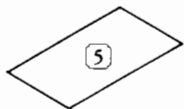
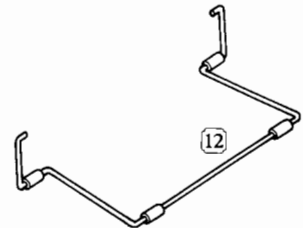
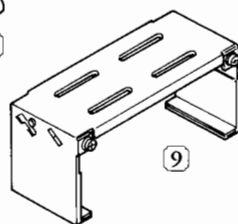
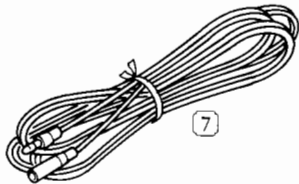
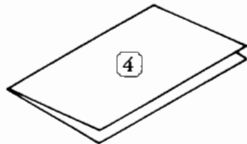
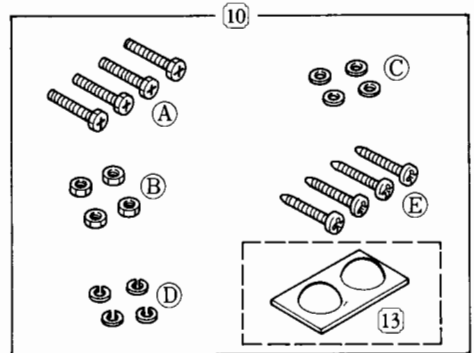
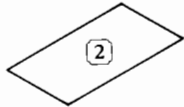
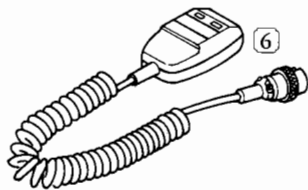
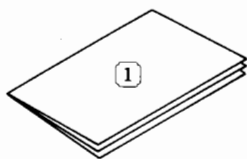
目次

梱包図／付属品	2	メモリー方法	28
ご使用前に	3	①周波数を記憶させる方法	28
特長	3	②書き込まれている	
車への取付け方法	4	メモリー周波数を変更する方法	30
①車への取付け場所	4	③オフセット周波数のメモリー方法	32
②ブラケットの取付け方法	4	④CALL周波数の変更方法	32
③電源ケーブルの配線方法	5	メモリー周波数の消去方法	33
④アンテナの接続方法	6	SCAN動作について	33
⑤車載用アンテナの取付け方	7	リチウム電池について	34
固定局で使用される場合	8	フオンバンドについて	35
①安定化電源について	8	故障とお考えになる前に	36
②固定局アンテナの取付け方	8	保証・アフターサービスについて	37
各部の名称と動作	10	定 格	38
運用方法	23	申請書の書き方 (C6000、C6000S)	39
レピーター運用	24	モーターブラケット取付け穴加工型紙	41
トーンスケルチ運用	27		

梱包図/付属品 開梱しましたら、付属品の確認をしてください。



- ① 取扱説明書..... 1
- ② 保証書..... 1
- ③ 営業所一覧表..... 1
- ④ 回路図(ブロックダイヤグラム含む)..... 1
- ⑤ 愛用者カード..... 1
- ⑥ マイクロホン (CMP838)..... 1
- ⑦ 電源コード (赤・黒) 2.0m 1
- ⑧ 3.5φ プラグ
(EXT.SPKR および EXT.METER 用) 1
- ⑨ モービルブラケット..... 1
- ⑩ モービルブラケット止めビス関係.....一式
 - Ⓐ 六角ボルト (5mm×20mm) 4
 - Ⓑ 六角ナット (5mm) 4
 - Ⓒ 平ワッシャー (5mm) 4
 - Ⓓ スプリングワッシャー (5mm) 4
 - Ⓔ タッピングビス (5mm×15mm) 4
- ⑪ マイクハンガー..... 1
- ⑫ スタンド(無線機用)..... 1
- ⑬ ゴム足(無線機用)..... 2
- ⑭ 予備ヒューズ(8A)..... 1



ご使用の前に

設置場所

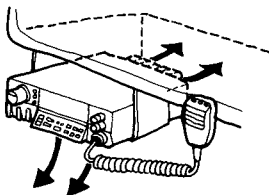
本機の設置場所として次の点に留意してください。

- ① 高温、多湿、ほこりの多い場所、特に日光が直接当たる場所は避け、風通しのよい乾燥した場所に設置してください。



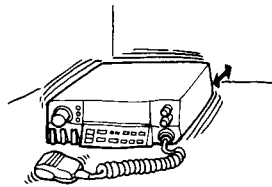
- ② ヒートシンクの冷却効果を妨げないよう、背面及び底面には十分スペースをとってください。

長時間使用のときは、無線機本体が暖かくなりますが使用上支障ありません。



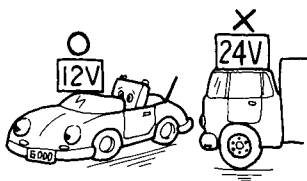
- ③ 車に取付ける際には、本機の背面が直接シートにふれないようにするなど放熱には十分配慮してください。

また、なるべく振動を直接受けない場所や状態での運用を心がけてください。



電源について

- ① 本機はDC12V仕様車用です。大型車など24Vバッテリーには使用できませんのでご注意ください。



- ② 絶対AC100Vには接続しないでください。13.8Vで8A以上の安定化電源を使用して下さい。

特長

- ① 1200MHz帯と430MHz帯の2つのバンドを同時に受信できます。
- ② 2つのバンドを使つての同時送受信も可能。
1200MHzで受信、430MHz帯で送信、あるいは逆の関係でのフルデュプレックス交信が簡単にでき、電話の感覚で使うことができます。
- ③ 2つのバンド共、各々独立した周波数表示器やSメーター、あるいはBUSYインジケータの機能もっています。
- ④ 2つのバンド共、各々独立したボリュームツマミとスケルチツマミを持ち、各バンドを各々好みの音量やスケルチ感度に合わせることができます。
- ⑤ 外部スピーカーを利用してバンドごとに独立した音を聞くことができます。
 - 外部スピーカーを付けない時は、2つのバンド共内蔵スピーカーから音がでます。
 - 1200MHz側の端子に外部スピーカーを接続すると、外部スピーカーが1200MHz帯用になり、内蔵スピーカーが430MHz帯用になります。
 - 430MHz側の端子に外部スピーカーを接続すると、両バンド共一個の外部スピーカーから音がでます。この時、内蔵スピーカーは鳴りません。
 - 両方の端子に各々外部スピーカーを接続すると、各々のバンド共独立した音がでます。
- ⑥ サブバンド機能
どちらかのバンドで送信中であっても、もう一方のバンドの受信周波数を変化させることができます。
- ⑦ オートミュート回路
聞きたい方のバンドに信号が入った時、もう一方のバンドの音量を自動的に低下させるオートミュート回路内蔵。
- ⑧ 各種マイコン機能搭載
 - 1200MHz帯でも430MHz帯でも自由に書込みのできる10チャンネルメモリー
 - メインバンドのみメモリースキャン可能
 - 2バンドのメモリースキャン可能
 - コールチャンネルの周波数変更が可能
 - マイクロホンによるリモートコントロール機能が拡大
UP、DOWNボタン、コールボタン、メモリーリコールボタン、バンド切り換えボタンをマイクロホンにつけました。
- ⑨ トーンスケルチ取付けが可能
別売品のCTN111を実装するとトーンスケルチ運用ができます。
- ⑩ AQSオプション(別売品)接続端子付。

車への取付け方法

1 車への取付け場所

C6000、C6000Sの取付け場所は、ダッシュボードの下、コンソールボックスの横および計器類の下などをおすすめします。

注意

次のような場所への取付けはさけてください。

- ヒーターやクーラーの吹出しダクトの近く
- 直射日光のあたる場所
- 振動の多い所
- 自動車本体の電子回路の近く
- その他安全運転に支障を来す場所



2 ブラケットの取付け方法

ブラケットを取付ける場合、ブラケットがしっかり固定される場所を選び必ず4本のビスでしっかり固定してください。

- ブラケット取付け用穴加工型紙は41ページに記載されていますのでご利用ください。

① 5mmの六角ボルトを使用する場合は5.2~5.5mm、また5mmのタッピングビスを使用する場合は4.0~4.3mmの穴をドリルであけてください。

② 5mmの六角ボルトを使用する場合は、図2のようにワッシャーにビスを通し、ブラケット側(車内)から車体内装にあけた穴に通して、内装側よりワッシャー、次にナットを通して固定します。(六角ボルト4本を固定します。) 5mmのタッピングビスを使用する場合は穴にタッピングビスを直接ネジ込んでください。ネジ山が自動的に切り込まれて固定されます。

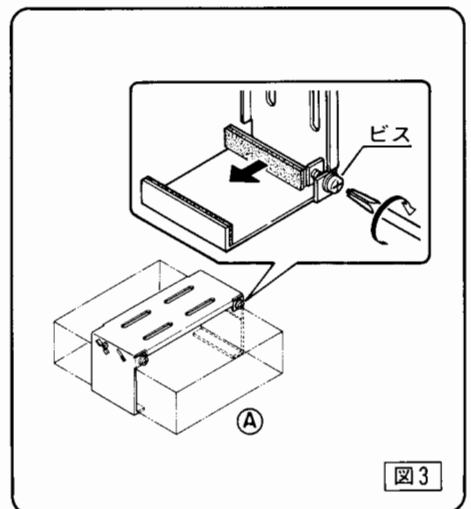
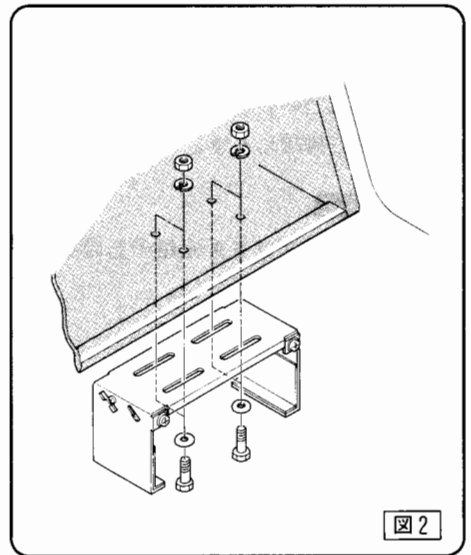
ビスを締めつけるときは、スパナか⊕ドライバーをご使用ください。

③ 本機の後面パネルからの同軸ケーブル、および電源ケーブルと、アンテナからの同軸ケーブルおよび電源からの電源コード(付属の)を接続します。

④ 本機をモバイルブラケットに図3Aのように入れ、ドライバーで左右のビス2本を均一に締めつけると、本機が固定されます。

注意

ブラケットに本機を入れる前に電源コード、同軸ケーブルは接続しておいてください。



3 電源ケーブルの配線方法

- ① C6000、C6000S への電源供給は、自動車のバッテリーより行います。
- ② 自動車のバッテリーとC6000、C6000Sとの接続は、C6000、C6000S に付属されている2.0mの電源コードを使用し、図4のように行ってください。

注意

C6000、C6000S は12V仕様車用ですので、24V仕様車で使用される場合は、24Vを12Vに変換するDC-DCコンバーターをご使用ください。

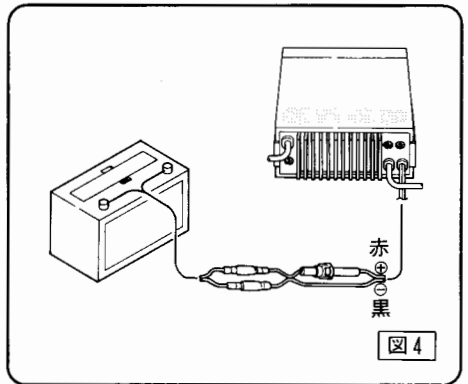


図4

- ③ 付属の電源コード(赤と黒)は、C6000、C6000Sの電源用です。

- ヒューズ付電源用赤コードは、車のイグニッションキーを通った後の12V ⊕端子に接続します。
- 黒コード⊖は、12V ⊖端子に接続します。

注意

ヒューズは8A定格のものを必ずご使用ください。

電源コードの接続作業は、ゴム部のカシメ部分を持って行ってください。

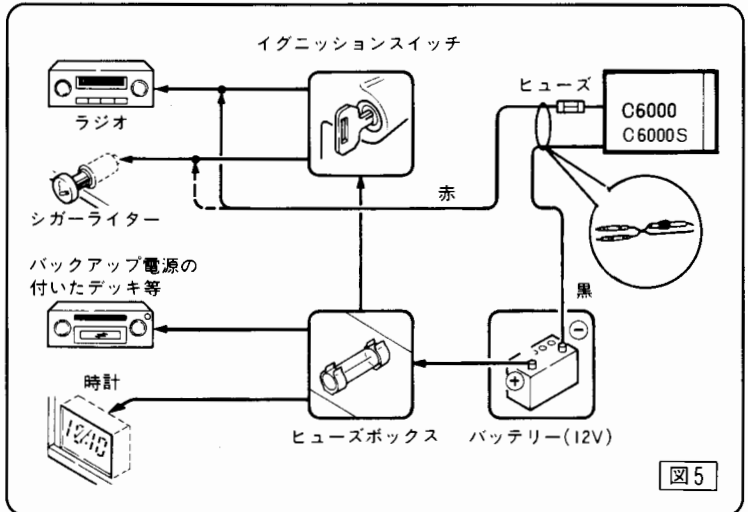
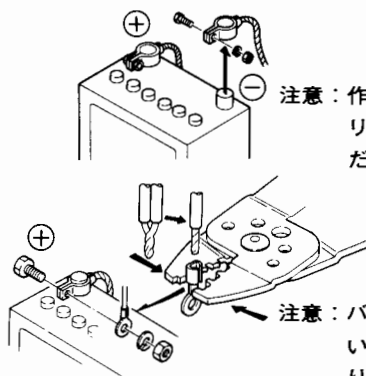


図5



注意：作業を行う前に必ずバッテリーの⊖端子をはずしてください。

注意：バッテリー端子がゆるまないようにスパナ等でしっかりと締めつけてください。プラス⊕側の作業完了後は、外したマイナス側のコードをもと通りしっかりと締めつけてください。

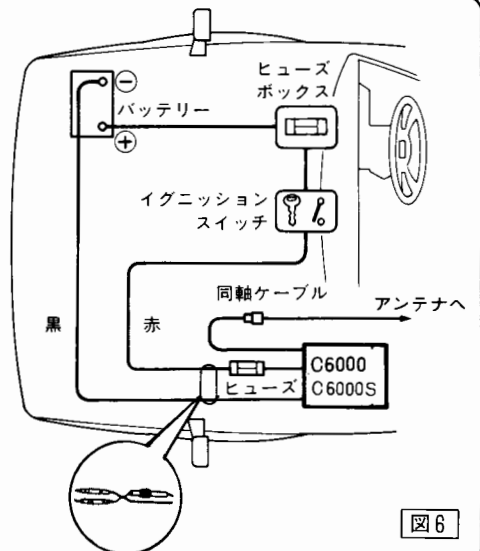


図6

4 アンテナの接続方法

無線機の送信および受信性能は、使用するアンテナの種類またはアンテナの特性によって大きく左右されますので、1200MHz帯および430MHz帯の運用目的、アンテナの設置条件などを考慮してお選びください。

① 独立したアンテナに接続する場合(図7)

- ① C6000、C6000S 本体の 1200MHz 用同軸ケーブルに、1200MHz帯のアンテナからの同軸ケーブルを接続します。
- ② C6000、C6000S 本体の 430MHz 用同軸ケーブルに、430MHz帯のアンテナからの同軸ケーブルを接続します。

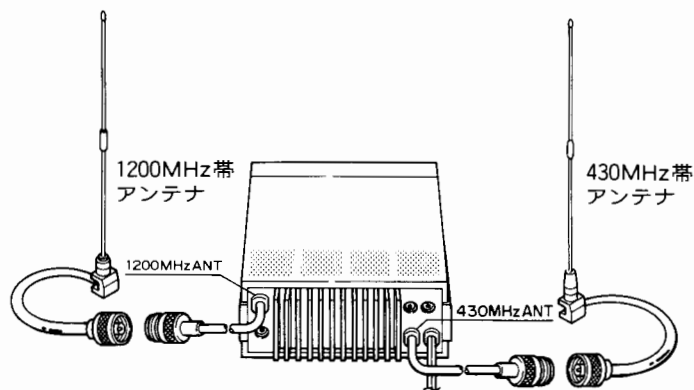


図7

② 共用アンテナに接続する場合(図8)

- ① 430MHz帯、1200MHz帯共用アンテナを使用する場合は430MHz、1200MHz帯用デュプレクサーが必要になります。

デュプレクサーにアンテナからの同軸ケーブルと無線機からの同軸ケーブルを正しく接続してください。(デュプレクサーの取扱説明書をお読みにになり正しくご使用ください。)

注意

共用アンテナのなかには、デュプレクサーが内蔵されているものがありますので良くたしかめて購入してください。

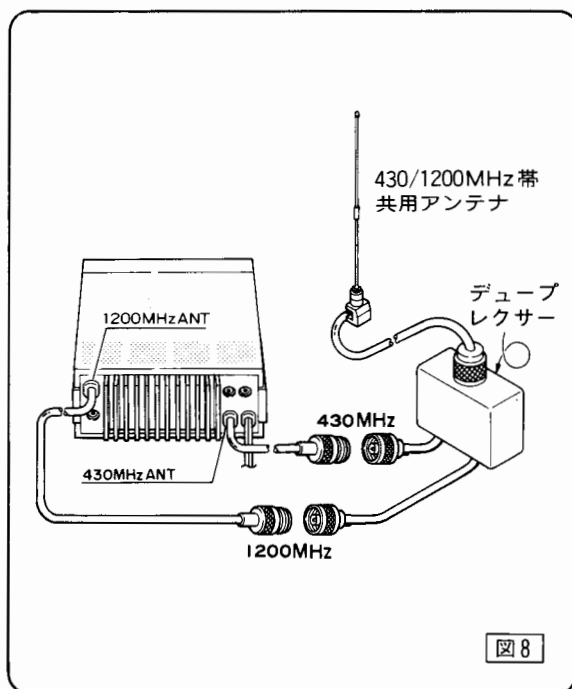


図8

5 車載用アンテナの取付け方

① 車載用アンテナの取付け場所

と、取付け場所に合ったアンテナ基台は図9のような種類がありますので、取付けるアンテナおよび車種に合ったアンテナ基台をお選びください。

② アンテナ基台には、同軸ケーブルがついています。この同軸ケーブルは、電波が通る大切なケーブルです

のでキズなどつけたり、押しつぶしたりしないよう取扱いには充分気をつけてください。

③ 同軸ケーブルを車内に引込む

ときは、図10のようにしてください。

注意

- 本機の性能を十分に発揮していただくためにも特性の優れたアンテナをご使用ください。アンテナのSWRは1.5以下になるようにアンテナを調整し使用してください。SWRが悪いと正規の送信電力が出なくなります。
- アンテナ基台を取付けるときは、アンテナ基台と車体のアースが完全にとれるようにしてください。

- 同軸ケーブルの引込み部は、雨水が車内に入らないよう充分ご注意ください。またドアの開閉、窓の開閉などで同軸ケーブルが損傷しないよう固定してください。

- 自動車本体の電子制御回路附近の配線は避けてください。電子制御回路が誤動作することがあります。

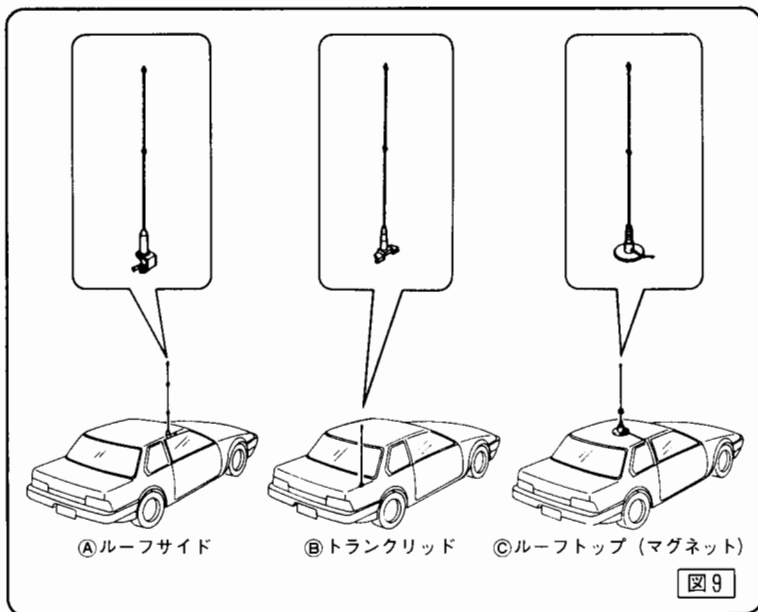


図9

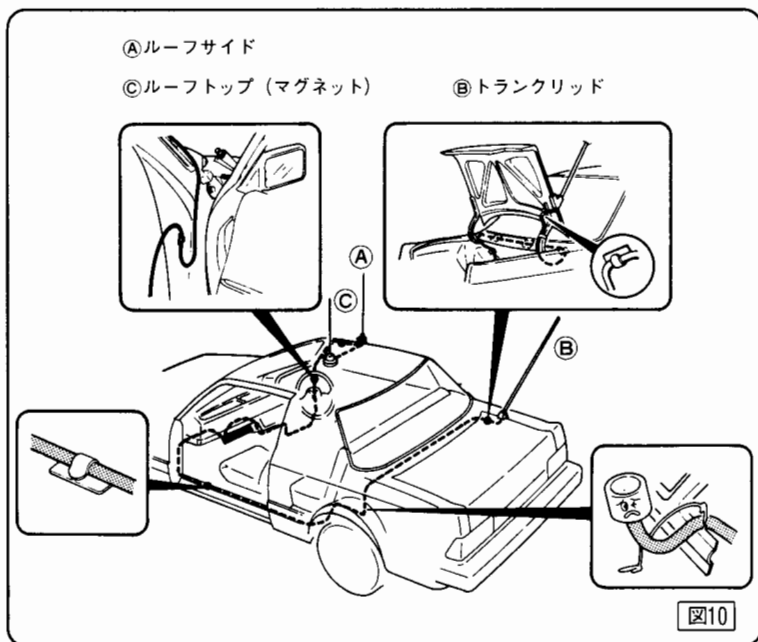


図10

- アンテナは、周波数に合わせてありますので、切断および加工等はしないでください。またアンテナが不備ですと、正規の送信電力が出なくなることがあります。

固定局で使用される場合

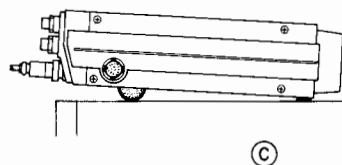
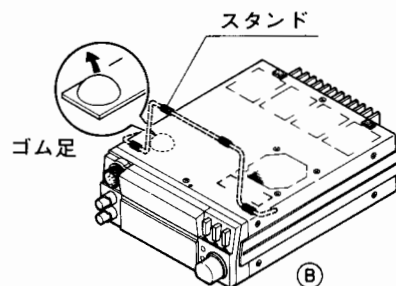
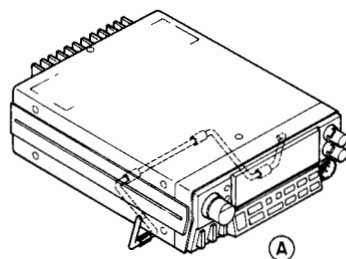
1 安定化電源について

卓上で使用される場合

本機を固定機としてご使用されるときは、付属のスタンドを図11のように本機にセットしてください。

注意

C6000、C6000S を固定局として使用されるときは、安定化電源は D.C. 出力 13.8V、出力電流 8A 以上の電圧変動およびリップルの少ないものをご使用ください。(CPS03は使用できません。)



ゴム足の取付け方法

1. ブラケット止めビスなどが入っているビニール袋より半球形のゴム足を取り出します。
2. ゴム足を付ける部分の汚れをふきとります。
3. ゴム足の剝離紙を剥がし、無線機本体に固定します。

図11

2 固定局アンテナの取付け方

ローカル QSO 用にはグラウンドプレーンアンテナ (無指向性) が適していますし、遠距離との QSO には八木アンテナ (指向性が有る) が適していますので目的および用途に合ったアンテナをお選びください。

アンテナから本体までの同軸ケーブルが長くな

り過ぎますと、同軸ケーブルでの損失が大きくなりますので、同軸ケーブルはなるべく最短距離を通すようにしてください。アンテナの給電部から、無線機までの長さ 10m までですと 10D2V、30m まででは 11D4AF 以上の太い同軸ケーブルをご使用ください。

各部の名称と動作



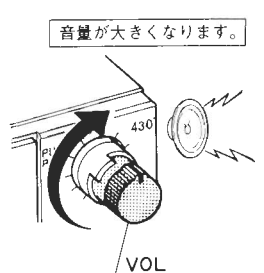
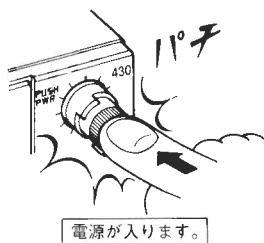
① PUSH PWR

【電源スイッチ/音量調節ツマミ(430MHz帯)】

①電源のON、OFFと430MHz帯の音量調節を伴ったツマミです。ツマミを一度押すと電源がONになり、もう一度押すとOFFになります。

②梱包を開いて最初に電源スイッチをONにすると1295.00、433.000が表示されます。

③ツマミを時計方向(↻)に回すにしたがって音量が大きくなります。



② SQL [スケルチツマミ]

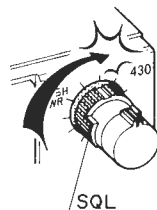
① 430MHz帯用のSQLツマミ

FM特有の“ザー”というノイズを消すツマミです。ツマミを反時計方向(↺)に回し“ザー”

というノイズが出るようにしてください。

(初期設定では反時計方向に回し切っておりあります)次に時計方向にゆっくり回し“ザー”というノイズが聞こえなくなる所で止めてください。

雑音がかかります。



アドバイス

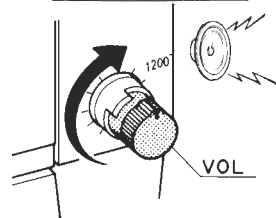
SQLツマミを反時計方向(↺)に回し“ザー”というノイズが出るようにした場合または、信号が加わった時、表示部のスピーカマーク(■)が点灯します。

③ VOL [音量調節ツマミ(1200MHz帯)]

①1200MHz帯の音量調節をするツマミです。

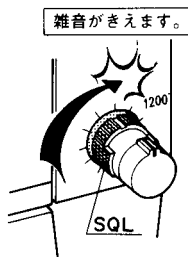
②ツマミを時計方向(↻)に回すにしたがって音量が大きくなります。ツマミを反時計方向(↺)に回すにしたがって音量が小さくなります。

音量が大きくなります。



④ 1200MHz 帯用の SQL ツマミ

1200MHz 帯用 SQL ツマミと同じ動作をします。



注意

- SQL ツマミを時計方向 (↻) に回しすぎないでください。弱い信号が受信できなくなります。
- スキャン動作 (メモリスキャン等) を行うときは、SQL 調節完了状態 (ザーというノイズが聞こえない) にしておいてください。
- SQL ツマミの調節は、空きチャンネルで行ってください。

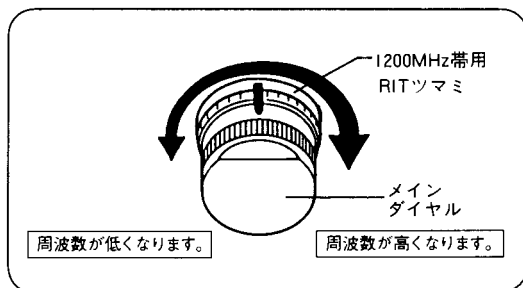
⑤ PUSH RIT

[RIT ON/OFF (1200MHz帯)]

このスイッチを押すことにより、メインダイヤル外側のRITツマミの動作が可能となります。もう一度押すと、RIT OFFとなります。このときは、RITボリュームの位置に関係なくRIT ONの前の周波数に戻ります。

⑥ メインダイヤルツマミ

- ① 送受信周波数を変化させるメインダイヤルツマミです。
- ② メインダイヤルツマミは、時計方向 (↻) に回すと周波数が高くなり、反時計方向 (↺) に回すと周波数が低くなります。
- ③ 変化する周波数 (チャンネルステップ) は、10kHz と 20kHz です。チャンネルステップの切り換えは、STEP ボタン (ステップ) で行います。
- ④ 送受信周波数は、1200MHz 帯と 430MHz 帯と別々に変えることができます。また、メインバンドで送受信しながら、SUB バンドの周波数を変えることができます。

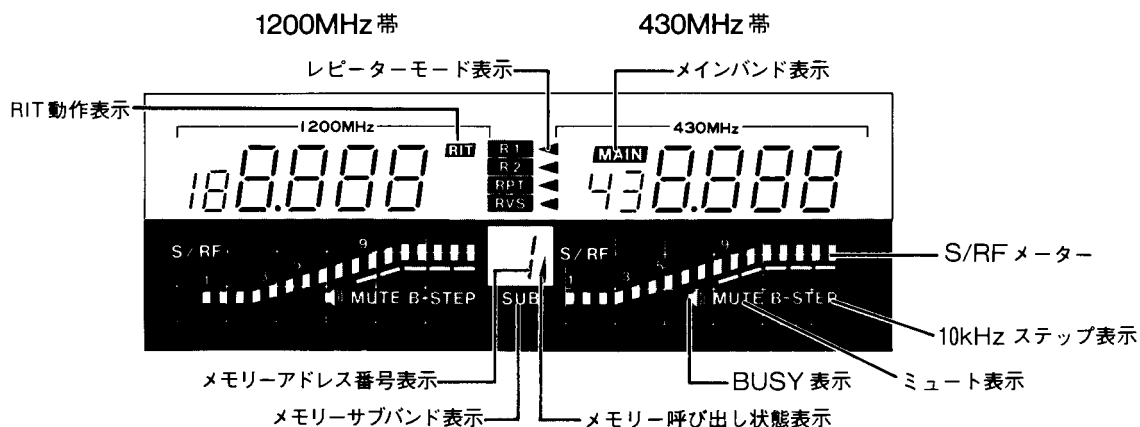


⑦ 1200MHz帯用 RITツマミ

PUSH RITスイッチがONのとき、受信周波数を連続的に可変することができます。

⑧ 表示部

表示部は大型 LCD ディスプレイを採用し、周波数表示は1200MHz帯と430MHz帯を独立させ、同時ワッチができるツインバンドの威力を十分発揮できるよう設計されています。



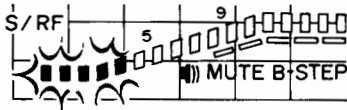
■S/RF メーターについて

① 1200MHz帯、430MHz帯が各々独立したS/RFメーターです。

受信時はSメーターとし、送信時はRFメーターとして動作します。

メーターのダイナミックレンジは、約20dBあります。

② Sメーター動作は、入力信号の強弱によりLCDが左側より右側に向かって点灯してゆきます。



③ RFメーター

マイクロホンのPTTボタンを押し、無線機本体がHi POWER送信状態のときは、全てのLCDが点灯します。

LOW POWER送信のときは、5～7個のLCDが点灯します。



Hi Powerのとき

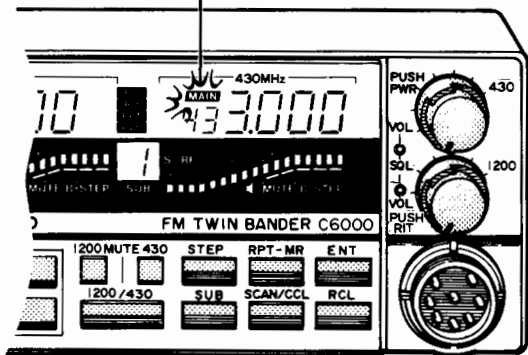
⑨ 1200/430

[1200/430MHz帯切り換えボタン]

① 1200MHz/430MHz帯を切り換えるボタンです。

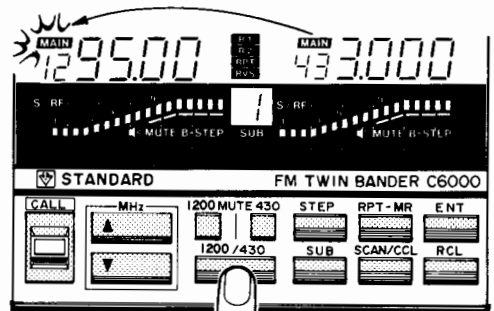
初期設定（工場出荷時またはリセットボタンを押した時）は、430MHz帯になっています。

初期設定は430MHz帯になっていますので、梱包を開いて電源スイッチをONにすると、430MHz帯の“MAIN”が点灯します。



② このボタンを押すと表示部の1200MHz/430MHz帯のどちらかにMAINが表示され、表示されているバンドで送受信できます。

● 1200/430MHz帯切り換えボタンを押すと切り換わったバンド(1200MHz帯)の“MAIN”が点灯し、今までのバンド(430MHz帯)の“MAIN”は消えます。

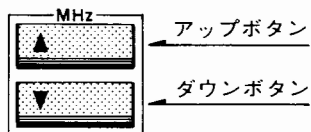


押して“MAIN”バンドを切り換える。

MAINが表示されているバンドをメインバンドと表し、MAINの表示がされていないバンドをサブバンド(SUBバンド)と表します。

⑩ MHz [メガヘルツボタン]

- ① 周波数を1MHz づつアップまたはダウンするボタンです。
- ② ▲ボタンを押すと1MHz づつアップし、押し続けると連続してアップします。
- ③ ▼ボタンを押すと1MHz づつダウンし、押し続けると連続してダウンします。

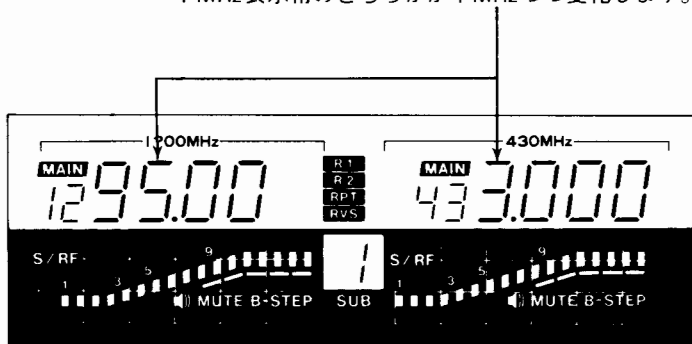


- ④ 1200MHz帯のときは、更にSTEPキーを押しながらアップまたはダウンボタンを押すと10MHzのアップまたはダウンをします。

アドバイス

SUBバンド動作 (MAIN表示が点滅している方のバンド) のときは、MAIN表示が点滅しているバンドの周波数表示が変化します。

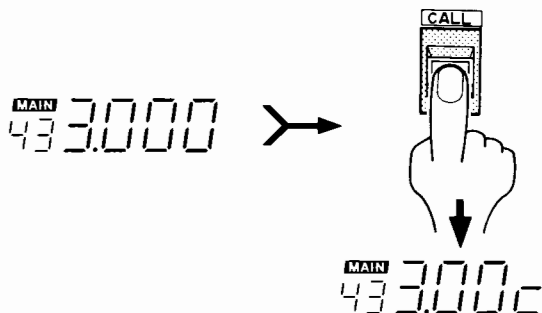
1 MHz表示桁のどちらかが1 MHz づつ変化します。



⑪ CALL [コールボタン]

- ① 呼び出し周波数を呼び出すボタンです。1200MHz帯は1295.00cが430MHz帯は433.00cが表示されます。
- ② 呼び出し周波数の1295.00cおよび433.00cを任意に変えることができますので、クラブチャンネル等としての優先呼び出し利用ができます。詳細は、32ページを参照してください。

〔例〕 430MHz帯がメインバンドのとき



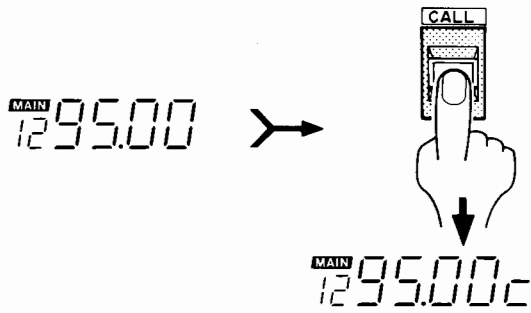
アドバイス

SUBバンド動作 (MAIN表示が点滅しているバンド) のときは、MAIN表示が点滅しているバンドの周波数表示が変化します。但し呼び出し周波数の書き換えはできません。

注意

SUBバンド動作の操作終了後、約5秒で433.0000になりSUBバンド動作が自動的に解除されます。

〔例〕 1200MHz帯がメインバンドのとき



⑫ R1、R2、RVS

[レピーター運用ボタン]

レピーター運用ボタンで、430MHz/1200MHz帯共に有効です。

■ **R1** : このボタンを押すと、表示部の R 1 右に ◀ が表示されトーン周波数 88.5Hz のレピーター運用状態になります。
430MHz でのオフセット周波数は 5MHz、1200MHz でのオフセット周波数は 20MHz、トーン周波数 88.5Hz は固定になっています。

(RPT-MR ボタンを押した場合にも表示部の R1 右に ◀ が表示されます)

■ **R2** : このボタンを押すと、表示部の R 2 右に ◀ が表示されオフセット周波数はメモリーアドレス番号 A で設定された周波数、トーン周波数は任意の周波数 (別売品の CTN111 を実装したときのみ) に設定できます。

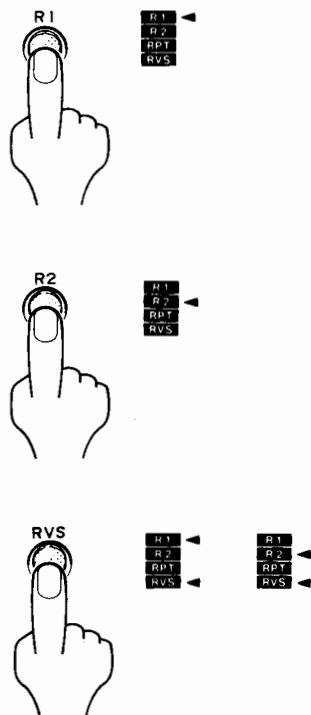
メモリーアドレス番号 A の周波数は、5MHz、b は 20MHz に初期設定されていますが任意に書き換えができます。

■ **RVS** : このボタンを押すと、表示部の RVS 右に ◀ が表示され R1 動作および R2 動作の周波数関係が逆 (リバース動作) になります。

RVS ボタンは R1、R2 または RPT-MR ボタンが押されている時のみ有効です。

R1、R2、RVS の各ボタンをもう一度押すと R1、R2、RVS 動作が解除されます。

詳細は、24 ページを参照してください。



注意

レピーター運用動作に於いて、アマチュアバンドを逸脱した場合 PTT ボタンを押しても受信状態のままになっていますのでレピーター運用手順に従って正しく操作してください。

⑬ RF PWR [送信出力切り換えボタン]

送信出力の切り換えボタンです。

ボタンを押すと Low Power もう一度押すと Hi Power になります。

	Hi Power	Low Power
430	10W 送信 (C6000)	1W 送信 (C6000)
	25W 送信 (C6000S)	5W 送信 (C6000S)
1200	10W 送信 (C6000, C6000S)	1W 送信 (C6000, C6000S)

注意 1200MHz帯の移動運用は出力最大 1W に制限されています。

なお送信電力は本体ケーブルに電力計を直結した状態で設定してあります。

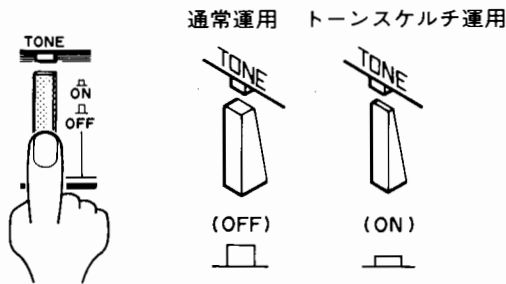
⑭ TONE [トーンボタン]

① トーンスケルチ運用と通常運用の切り換えボタンです。

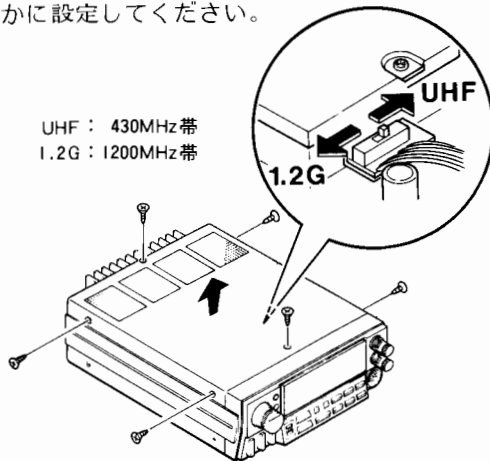
ボタンを押すとトーンスケルチ運用、もう一度押すと通常運用になります。

トーンスケルチ運用を行うには、別売品のトーンスケルチユニット CTN111 を実装してください。

CTN111 の取付け方法は、27、28 頁を参照してください。



- ② 1200MHz 帯および430MHz 帯のどちらか一方のトーンスケルチ運用ができますのでC6000、C6000S 本体内の切り換えスイッチでどちらかに設定してください。



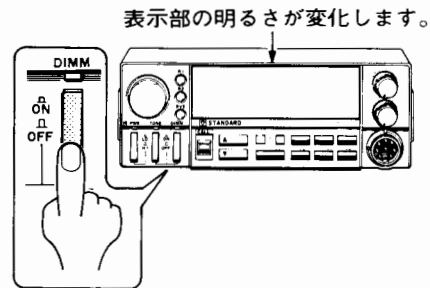
注意

- トーンボタンが押されていると、レピーター駆動用の 88.5Hz は動作しません。
- 同一トーン周波数局同士の交信はできますが、異なったトーン周波数の局との交信または、トーン運用できない無線機との交信はできません。
- トーンスケルチ運用のときは、予めトーン周波数を設定しておいてください。
- トーンボタンを押したままになっていると、通常運用をしている他局の交信内容を聞くことはできません。トーンスケルチ運用以外のときはトーンボタンを元に戻しておいてください。

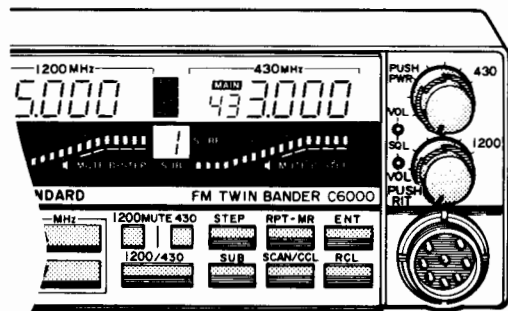
15 DIMM [ディマーボタン]

大型 LCD ディスプレイの明るさを 2 段階にかえるボタンです。ボタンを押すと暗くなり、もう一度押すととも

の明るさにもどります。



16 操作ボタン



① SCAN/CCL ボタン

このボタン一つでスキャン機能と CCL 機能の 2 つの働きを持っています。

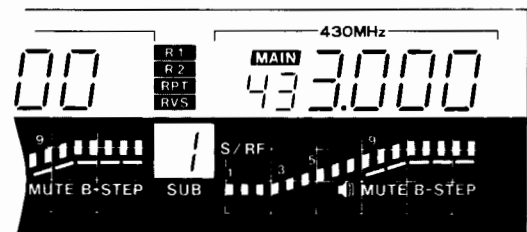
C6000、C6000S はポーズスキャン方式を採用しています。スキャン動作は、MHz 内をスキャンする MHz スキャンとメモリスキャンの 2 つを行います。

② STEP ボタン

チャンネルステップを 10kHz、20kHz の 2 段階に切り換えるボタンです。

10kHz ステップのときは表示部に B-STEP が表示されます。

通常は 20kHz ステップに設定しておいてください。

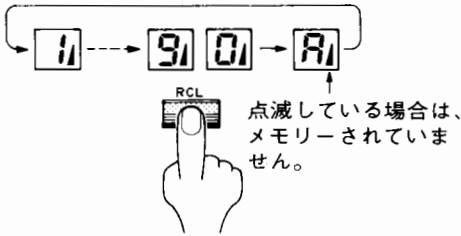


(10kHzステップのとき)
B-STEP が表示される

③ RCL ボタン

メモリー周波数を呼び出すボタンです。

ボタンを押すとメモリーアドレス番号が順次変わります。またメモリー呼び出し状態を示す▲がメモリーアドレス番号右に表示され、そのアドレス番号にメモリーされているときは点灯し空きのときは点滅します。



バンドが異なるメモリー周波数を呼び出すと、アドレス番号下に SUB が表示されます。

(メインバンド) (サブバンド)
 MAIN 1295.00 SUB 433.000



SUB が点灯した場合は、メモリーアドレス番号 2 にサブバンドの周波数がメモリーされていることを知らせています。

注意

メモリー呼び出し中にバンドを切り換えると、メモリー呼び出し状態が解除されます。

アドバイス

マイクロホンの RCL ボタンを押し、メモリー呼び出し状態にすることができます。

④ ENT ボタン

記憶回路に周波数をメモリーするとき押すボタンです。

メモリーできる周波数の種類は———

- RPT-MR周波数(1200MHz帯と430MHz帯で各々1チャンネル)
- オフセット周波数 (R2 のオフセット周波数)
- CALL 周波数(1200 MHz 帯、430 MHz 帯で各々1チャンネル)
- 運用周波数(1200 MHz 帯と 430MHz 帯と併せて10チャンネル)

01 ~ 91 (1200 MHz/430MHz 帯) 10チャンネル

MAIN 1295.00c (1200 MHz 帯) 1チャンネル

MAIN 433.00c (430MHz 帯) 1チャンネル

MAIN 439.920 (430MHz 帯) 1チャンネル

MAIN 1292.06 (1200MHz帯) 1チャンネル

MAIN 5.000 R1 (430MHz 帯) 1チャンネル

MAIN 2000 b1 (1200MHz帯) 1チャンネル

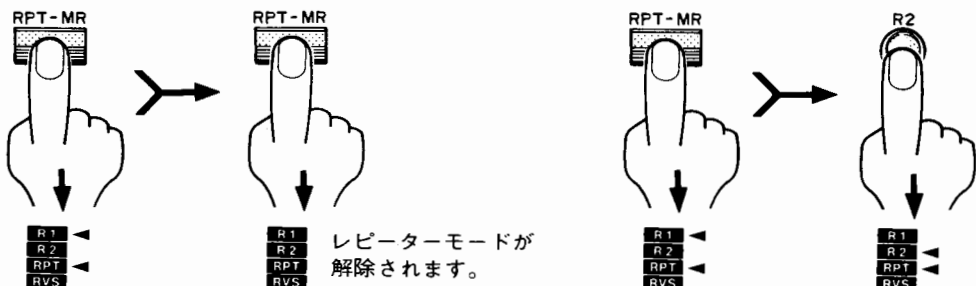
⑤ RPT-MR ボタン

レピーター専用メモリー周波数の呼び出しボタンです。

430MHz 帯が MAIN バンドのとき、この RPT-MR ボタンを押すとワンタッチでレピーター専用メモリー周波数が呼びだされ且つ R 1 右と RPT 右に ▲ が点灯しレピーターモードになります。

レピーター専用メモリー周波数は、430MHz帯では 439.920MHz、1200MHz帯では 1292.06MHz が初期設定されていますが、任意に周波数を変えメモリーすることができます。

この状態で R 2 ボタンを押すと、オフセット周波数およびトーン周波数は R 2 のモードになり、R 1 右の ▲ が消え R 2 右の ▲ が点灯します。



注意

- R1 のオフセット周波数およびトーン周波数は固定です。
- R2 のオフセット周波数は任意に設定できますが、トーン周波数は別売 CTN111 を実装

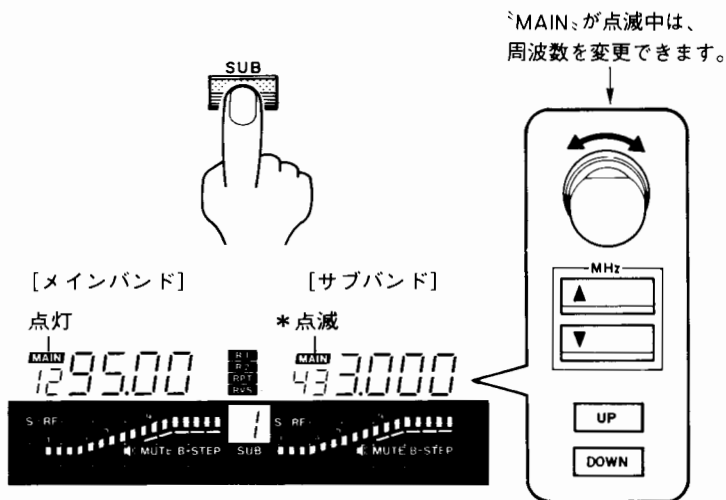
し設定してください。

- ⑫のR1、R2、RVSの項を参照してください。
- RPT-MR 動作中のR1モードおよびR2モードは記憶回路に記憶されています。

⑩SUB ボタン

このボタンを押すとSUBバンドのMAIN表示が点滅し、受信時またはMAIN表示のバンドで送信しているながらSUBバンドの周波数を変えられます。周波数変更操作完了後、約5秒すると自動的にSUBバンド動作が解除されます。

また、周波数変更操作完了後、もう一度SUBボタンを押すと、SUB動作は解除されます。



* メインバンドで送信状態になると点灯します。

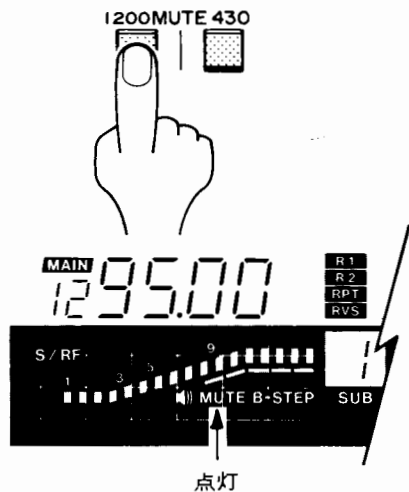
⑬MUTE ボタン

C6000、C6000Sは、1200MHz/430MHzを同時にワッチできますので、このボタンを押すと主にワッチしているバンドに信号が入ったとき(BUSY状態)に、もう一方のバンドの音量を下げるMUTE機能が働きます。

MUTE機能は、約12dB音量を下げます。

MUTEボタンは、1200MHzおよび430MHz帯各々にあり、ボタンを押すと、表示部に押されたバンドの方にMUTEが表示されます。

MUTEボタンの1200と430の両方を押します。この状態では、どちらかのバンドに信号が加わると、もう一方のバンドの音量が自動的に小さくなります。



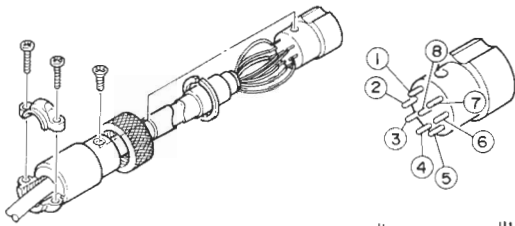
1200MHzの音量が下がります。



430MHzの音量が下がります。

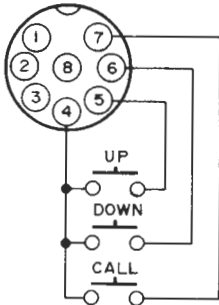
18 マイクロホン接続端子

付属のマイクロホンを接続する端子です。
マイクロホン接続端子の結線は下図のようになっています。



- ① 音声入力
- ② PTT
- ③ スピーカー出力
- ④ } UP、DOWN、RCL
- ⑤ } CALL、* (バンド切り換え)
- ⑥ }
- ⑦ }
- ⑧ グランド

当社指定以外のマイクロホンを使用する場合は、
下図のような簡易的な接続をしてください。
ただし RCL及び * (バンド切り換え) 動作は
できません。



注意

当社指定以外のマイクロホンを使用する場合は、
インピーダンスが 600Ω のものをご使用ください。

19 リセットボタン

マイコンをリセットするボタンです。
マイコンバックアップ用リチウム電池を交換したとき、あるいはマイコンが誤動作したとき、
非金属性の先の細いもので軽く押してください。

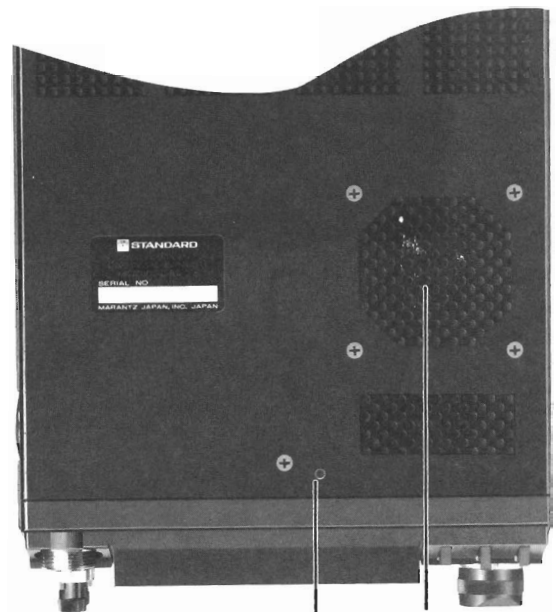
大型LCDディスプレイ部が一瞬消え、1295.00、
433.000 が表示されます。

注意

- 電源スイッチを ON OFF する毎に表示部の表示がおかしくなる場合は、リチウム電池を交換してください。
- マイコンをリセットするときは、C6000、C6000S の電源を ON の状態で行ってください。

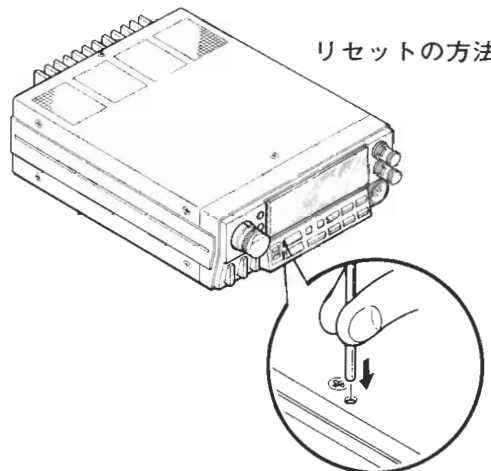
20 スピーカー

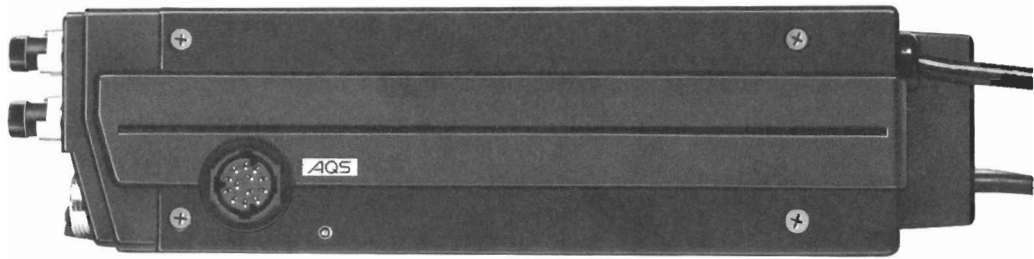
4Ω 50mm のダイナミック内蔵スピーカーです。



リセットボタン
スピーカー

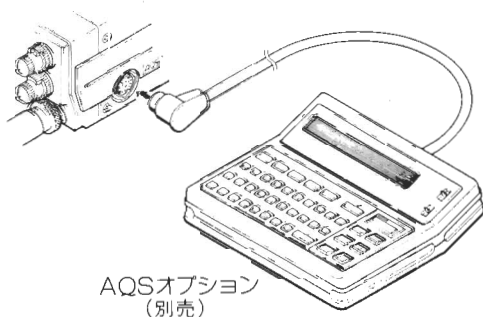
リセットの方法





② AQS 端子

別売品の AQS オプションを接続する端子です。AQS オプションを使用されるときは、付属マイクロホンの* ボタンで、通常動作から AQS 動作への切り換えができます。この場合には、マイクロホン内部のスイッチを切り換えてください。



AQS オプション
(別売)

AQS は Amateur Quinmatic System の略で、アイコム、マランツ、ヤエス 3 社の技術を結集して開発した一歩進んだ通信システムです。

AQS はアイコム(株)、日本マランツ(株)、八重洲無線(株)の 3 社で共同開発した統一規格の通信システムです。グループ各社間で互換性を持ったシステムですから幅広くご使用いただけます。

AQS 5つの特長

- チャンネルアクセス
- コールサインスケルチ
- コードスケルチ
- データ・メッセージ伝送
- コードメモリー

22 430MHz 用同軸ケーブル

アンテナからの同軸ケーブルを接続するN型コネクタ付同軸ケーブルです。

アンテナからの同軸ケーブルは必ず 50Ω のものをご使用ください。

23 1200MHz 用同軸ケーブル

アンテナからの同軸ケーブルを接続するN型コネクタ付同軸ケーブルです。

アンテナからの同軸ケーブルは必ず 50Ω のものをご使用ください。

24 電源コード

直流 13.8V を加えるギボシ端子付電源コードです。

付属の電源コード 2.0m を使用して、無線機に電源が供給できるように配線してください。

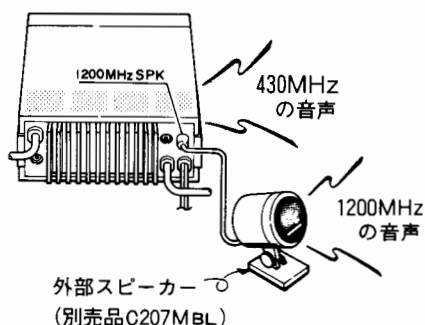
注意

- C6000、C6000S は12V仕様車用です。トラックなど 24V仕様車で使用される場合は、24Vを12Vに変換するDC-DCコンバーターをご利用ください。
- ヒューズは必ず定格のものを使用してください。
C6000、C6000S は 8A のヒューズを使用してください。

25 1200MHz SPKR [外部スピーカー端子]

外部スピーカーを接続する端子です。

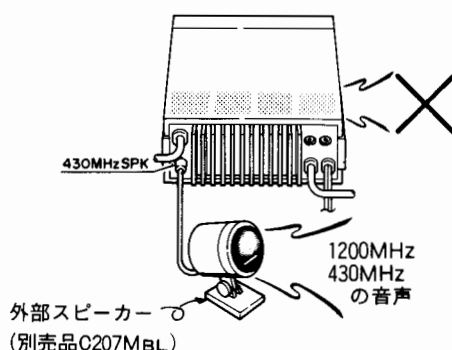
外部スピーカーを接続すると、接続した外部スピーカーは1200MHz帯として働き無線機の内蔵スピーカーは430MHz帯として働きます。



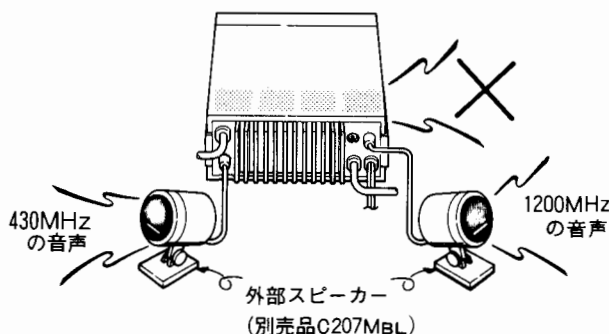
26 430MHz/EXT. SPKR [外部スピーカー端子]

1) 外部スピーカーを接続する端子です。

外部スピーカーを接続すると、接続した外部スピーカーは1200MHz帯と430MHz帯用として働き、無線機の内蔵スピーカーは働きません。



1200MHz 及び 430MHz 共外部スピーカーを接続すると、接続された外部スピーカーはそれぞれの働きをし、このとき無線機本体の内蔵スピーカーは働きません。



27 METER [外部メーター端子]

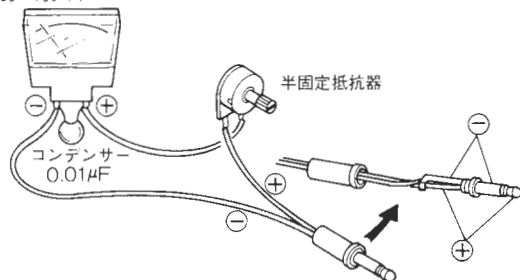
MAIN バンドのメーター出力が取り出せます。
アナログ用外部メーター接続端子です。
この端子に約 $50 \sim 100 \mu\text{A}$ の直流電流計を接続し、S メーターの出力端子としてご使用ください。
またメーターの振れを少なくしたい場合はメーター出力の+側に $47\text{K} \sim 100\text{K} \Omega$ 程度の半固定抵抗器を直列に入れ調整されることをおすすめします。

注意

図の回路例で直列抵抗が小さい場合は本体側のメーターの振れに影響をあたえることがあります。

回路例

50~100 Aメーター



- 半固定抵抗器を回してメーターの振れを調整してください。

■ マイクロホン



28 PTT [プレストークボタン]

- ① 送信と受信を切り換えるボタンです。

送信するときは、このボタンを押しながらマイクロホンに向かって話しをしてください。

- ② 受信状態にするときはボタンから手を離してください、受信状態になります。

29 CALL [コールボタン]

呼び出し周波数を呼び出すボタンで、無線機本体側の CALL ボタンと同じ働きをします。

30 RCL [リコールボタン]

メモリー呼び出し状態にするボタンです。もう一度押すとメモリー呼び出し状態が解除されます。

メモリーアドレス番号の呼び出しはできませんので、メモリーアドレス番号を呼び出すには、メモリー呼び出し状態にしておき、マイクロホン側の UP、DOWN ボタンまたは、無線機本体側の RCL ボタンで行ってください。

31 UP, DOWN [アップ、ダウンボタン]

UP, DOWN ボタンは2つの働きがあります。

①通常動作のときは、10kHz または 20kHz ステップで周波数を UP, DOWN します。

②メモリー呼び出し状態のときは、メモリーアドレス番号 (1-0) を順次呼び出します。(メモリーアドレス番号Aおよびbは呼び出しません)

ボタンを押し続けていると、連続して変化します。

32 * [スターボタン]

マイクロホン内部の切り換えスイッチにより、2種類の働きをします。

①工場出荷時の状態は、1200MHz 帯と 430MHz 帯のメインバンド切り換えをします。

②マイクロホン内部の切り換えスイッチを切り換えると、AQS における CAC (チャンネルアクセス コール) 動作になります。

③切り換えスイッチは次の手順で行ってください。

①マイクロホンの裏ケース止めビス2本を外します。

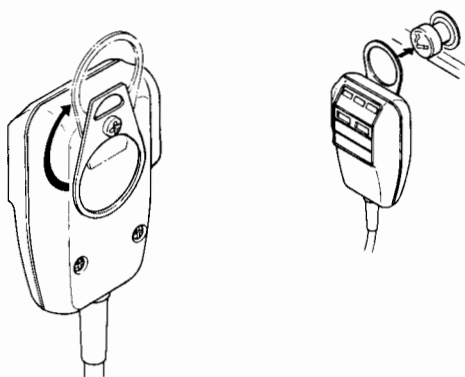
②プリント基板に取りつけられているスイッチを左(C)側にします。

③マイクロホンの裏ケースを元どおりにし、ビス2本で止めます。

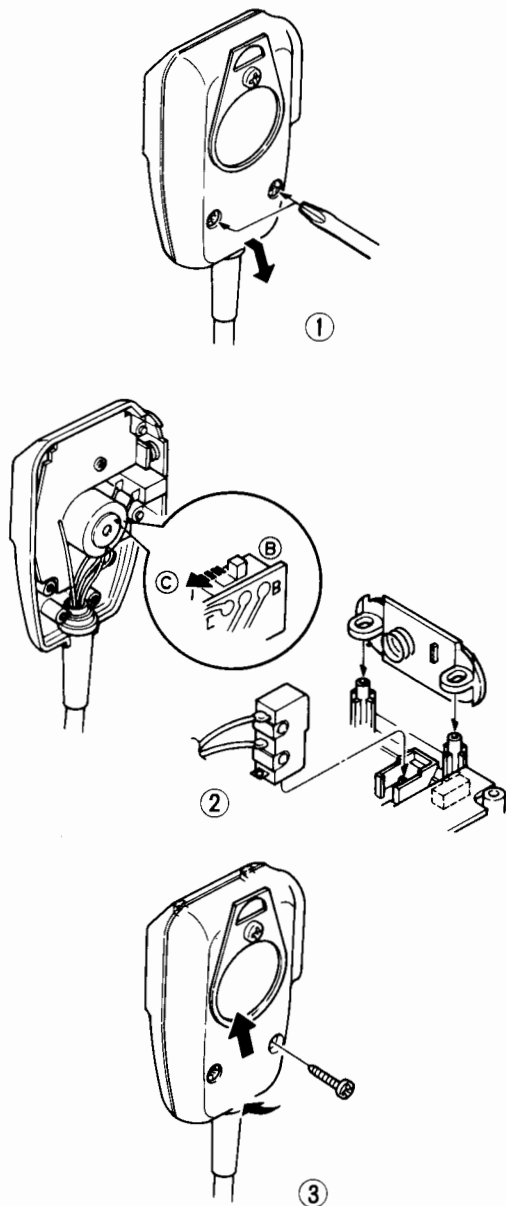
注意

PTT ボタンがスムーズに押せることを確認してください。

マイク取付け金具を回転させ、シガライター等に掛けてご使用になれます。



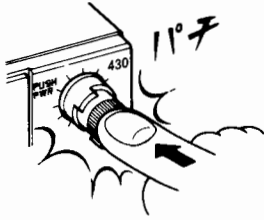
マイクロホン内部の切り換えスイッチのセットのしかた



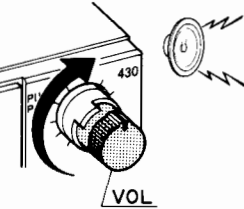
運用方法

アンテナ、電源ケーブル、マイクロホンの接続が終わりましたら次の手順で操作してください。

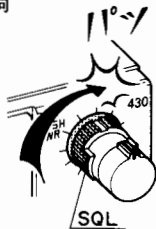
- 1** 電源スイッチ (PUSH PWR) を押して電源を ON にします。



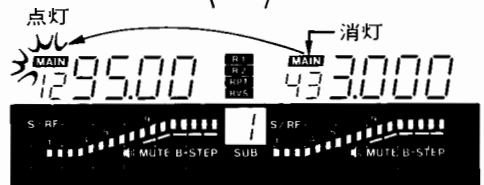
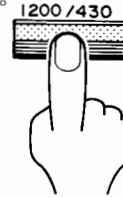
- 2** 430 MHz 帯の音量調節をします。
(ザーという音量を適量にします)



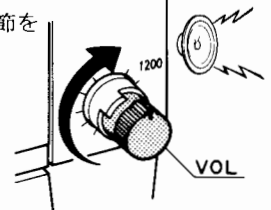
- 3** 430 MHz 帯のスケルチ調節をします。



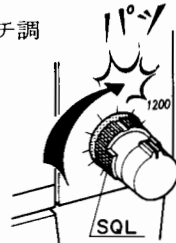
- 4** 1200/430 ボタンを押して 1200MHz 帯をメインバンドにします。



- 5** 1200MHz 帯の音量調節をします。



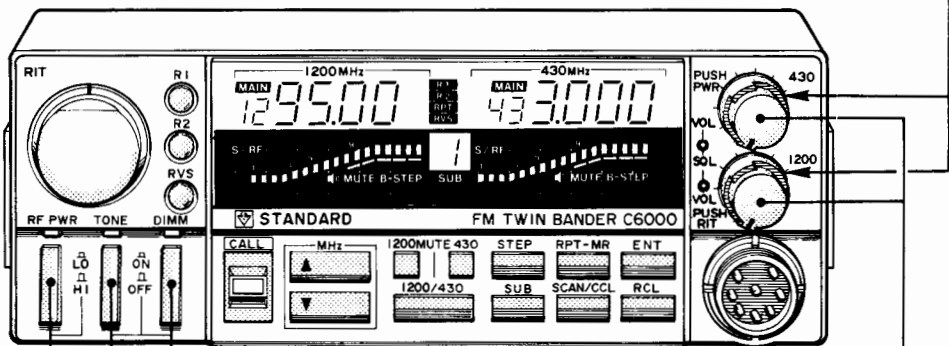
- 6** 1200MHz 帯のスケルチ調節をします。



これで準備完了です。この状態で通常運用ができます。

■初期設定時のボタンの位置

SQLツマミ:反時計方向に回し切っております。



押されていない状態(□)

押されていない状態(□)

HIの位置(□)

VOLツマミ:反時計方向に回し切っております。

レピーター運用

①レピーター運用について

無線交信をレピーター局（無線中継局）を介して行うことをいいます。

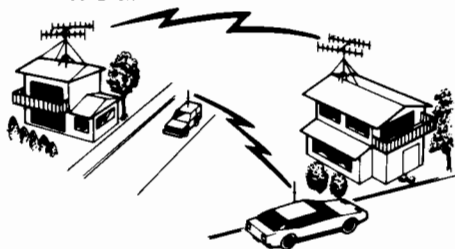
レピーター運用はレピーター局が開設されている地域でできますので、レピーター局の送受信周波数を各専門紙などで調べてください。

②レピーター運用の特色

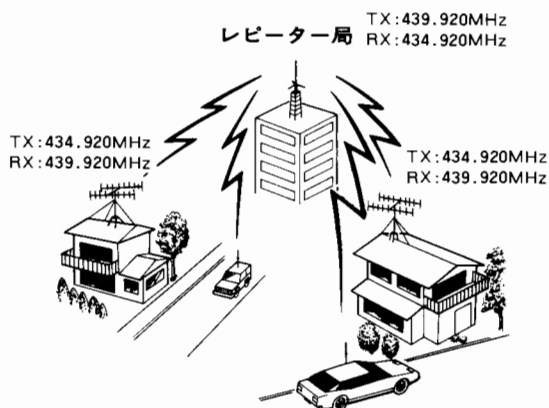
- レピーター局を介して送信と受信を異なった周波数で交信しますので、送受信周波数をシフトする機能をもった無線機が必要です。また、レピーター局を駆動するトーンエンコーダーが内蔵されていることが必要です。C6000、C6000Sにはレピーター局を駆動する88.5Hz（固定）が組み込まれていますので、レピーター運用がそのままできます。
- レピーター運用はレピーター局を介して交信を行いますので、小電力のトランシーバーで遠くの局との交信が可能になります。ハイパワーで運用しますと同じ周波数関係のレピーター局をアクセスしますので、C6000、C6000SはLoポジションでの運用をおすすめします。

従来の運用（430MHz帯の例）

TX RX:433.240MHz TX RX:433.240MHz



レピーター運用（430MHz帯の例）



③レピーター運用手順

C6000、C6000Sはレピーター運用の多様化に対応できるよう、RPT-MR、R1、およびR2の独立したレピーターモードがあります。

また、RPT-MR、R1、およびR2の周波数関係を逆転するRVSボタンを備え、レピーター運用を充実しました。

レピーター運用は、430MHz/1200MHz帯共にできます。

①RPT-MRモードの運用方法

- RPT-MRはレピーター専用の周波数がメモリーされており、RPT-MRボタンを押すとワンタッチでレピーターモードになります。（オフセット周波数は430MHz帯では5MHz、1200MHz帯では20MHz、トーン周波数は、88.5Hzです。
- C6000、C6000Sのレピーター専用メモリー周波数は430MHz帯は439.920MHz、1200MHz帯では1292.06が設定されていますが変更できますので、お近くのレピーター局の周波数に設定しなおしてください。または一番よく使用するレピーター局の周波数に設定しなおしておくと便利です。

手順（430MHz帯の場合）

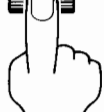
- ①メインバンドが430MHz帯になっていることを確認します。
- ②RPT-MRボタンを押すと439.920が表示しますので、表示周波数を近くのレピーター局の周波数に合わせます。（MHzボタン、メインダイヤルツマミで、設定してください。尚マイクロホンのUP/DOWNボタンは使用できません）
- ③周波数を変えると同時に、レピーターメモリー動作表示のRPT右の◀が点滅し、メモリー書き換え状態になります。
- ④ENTボタンを押すと(◀)が点灯し、RPT-MR周波数が書き込まれました。
- ⑤これで準備完了です。PTTボタンを押すと、オフセット周波数5MHz、トーン周波数88.5Hzでレピーター運用できます。

例 初期設定からの場合 (430MHz帯)

430MHz帯に
なっていることを
確認します。

MAIN
43 3.000

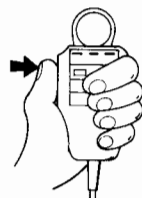
RPT-MR



R1
R2
RPT
RVS
MAIN
43 9.920

439.920MHz
(受信)

434.920MHz
(送信)

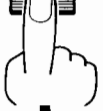


例 初期設定からPPT-MR周波数を変更する場合 (430MHz帯)

430MHz帯に
なっていることを
確認します。

MAIN
43 3.000

RPT-MR



R1
R2
RPT
RVS
MAIN
43 9.920

点減

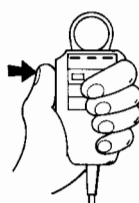
MAIN
43 9.900

ENT

点灯

439.900MHz
(受信)

434.900MHz
(送信)



② R1モードの運用方法

- MHzボタン、メインダイヤルツマミ、マイククロホンのUP DOWNボタンなどで自由にレピーターの周波数を設定しR1ボタンを押すだけでレピーター運用ができます。
(オフセット周波数は1200MHz帯が20MHz、430MHz帯が5MHz、トーン周波数は88.5Hzです)

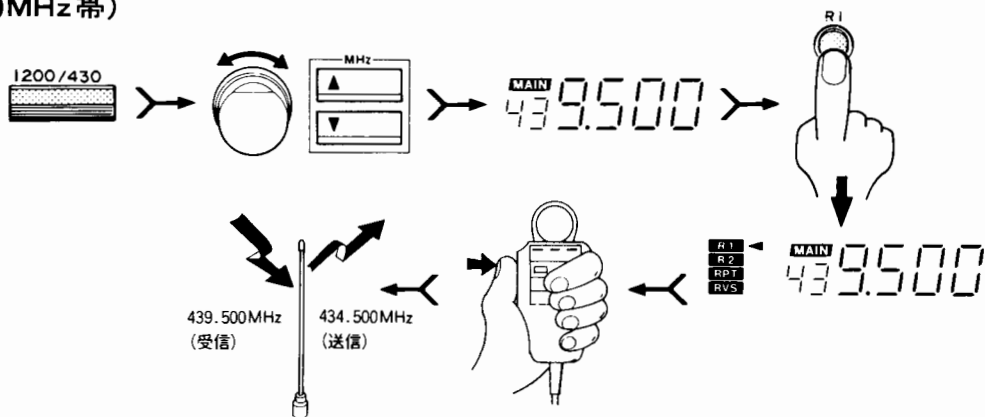
●R1モードの使用例

- ①メインバンドを希望のバンドにします。
- ②レピーター局の受信周波数に合せます。
- ③R1のボタンを押し、運用します。

多くのレピーター局を使用する場合は、各レピーター局の周波数をメモリーしておく便利です。

メモリー周波数を呼び出し、R1ボタンを押すとR1のレピーターモードになります。

例 (430MHz帯)

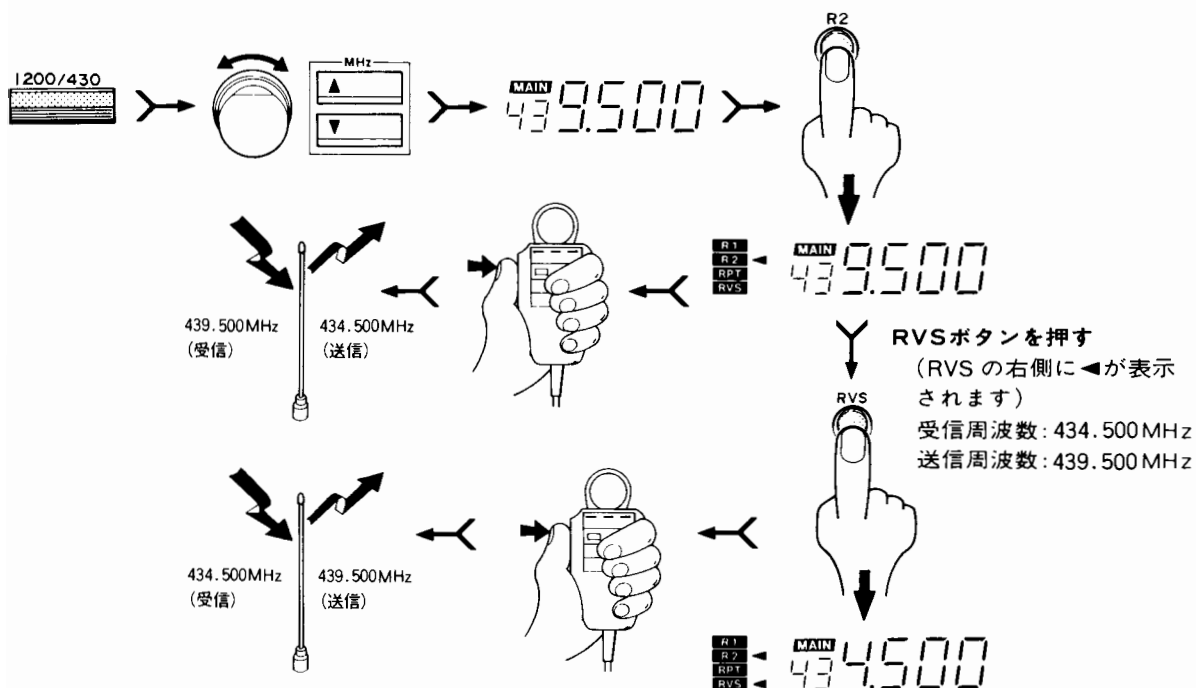


③ R2モードの運用方法

●運用方法はR1モードと同じですが、オフセット周波数はメモリアドレス番号A(430MHz帯)、およびb(1200MHz帯)で設定した周波数になります。初期設定は430MHzのとき5MHz、1200MHzのときは20MHzです。別売品のCTN111を取り付けてトーン周波

数を設定します。設定方法はCTN111の取扱説明書を参照してください。

例 (430MHz帯)



トーンスケルチ運用

④レピーター動作一覧表

操作ボタン	表示	オフセット周波数	トーン周波数	状態	初期設定値
RPT-MR	R1 ◀ R2 RPT ◀ RVS	430MHzは 5MHz固定 1200MHzは 20MHz固定	88.5Hz固定	メモリー呼び出し状態	439.92 1292.06
RPT-MR R2	R1 R2 ◀ RPT ◀ RVS	任意 (メモリーアドレス番号Aにて設定)	任意 (但し別売品CTN111実装時37種類可)	メモリー呼び出し状態	439.92 1292.06
R1	R1 ◀ R2 RPT RVS	430MHzは 5MHz固定 1200MHzは 20MHz固定	88.5Hz固定	ダイヤル周波数状態	
R2	R1 R2 ◀ RPT RVS	任意 (メモリーアドレス番号Aにて設定)	任意 (但し別売品CTN111実装時37種類可)	ダイヤル周波数状態	
R1 RVS	R1 ◀ R2 RPT RVS ◀	R1動作の周波数関係が逆になります。			
R2 RVS	R1 R2 ◀ RPT RVS ◀	R2動作の周波数関係が逆になります。			
RPT-MR RVS	R1 ◀ R2 RPT ◀ RVS ◀	RPT-MR動作の周波数関係が逆になります。			

別売品のトーンスケルチユニット(CTN111)を実装すると、トーンスケルチ運用ができます。

手順

- ①販売店または弊社サービスセンターでトーンスケルチユニットをC6000、C6000Sに取り付けます。この時予めトーン周波数を設定しておいてください。
トーン周波数の設定は、CTN111のディップスイッチで行います。
- ②無線機本体内部のスイッチでトーンスケルチ運用するバンドを設定します。
1200MHz帯または430MHz帯どちらかを選びます。
- ③トーンスケルチユニットCTN111を実装後、TONEボタンを押してトーンスケルチ運用状態にします。
- ④この状態で運用すると、同一トーン周波数の局の信号を受信したときのみ、スピーカーより音声が出ます。
- ⑤もう一度TONEボタンを押すと、トーンスケルチ運用が解除されます。

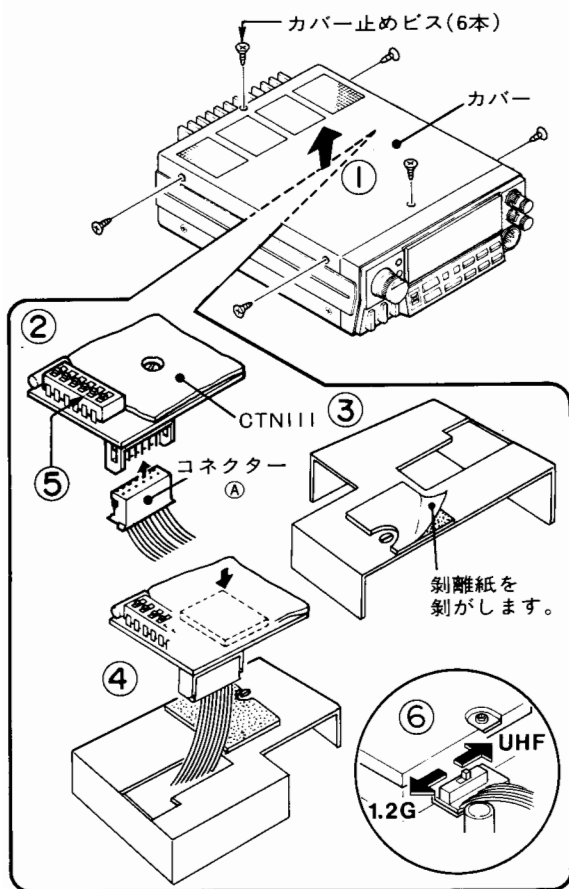
CTN111の取付け方法

- ①上蓋止めビス6本(上面2本、側面4本)を外し、上蓋を外します。
- ②無線機本体のコネクター④にCTN111をさし込みます。
- ③剥離紙をはがします。
- ④CTN111を貼り付けます。
- ⑤トーン周波数を設定します。(CTN111の取扱説明書を参照してください)
- ⑥トーンスケルチ運用するバンドのほうにスイッチを切り換えます。
1.2G:1200MHz帯、UHF:430MHz帯
- ⑦上蓋を元どおりにしめて、ビス止めします。

次頁の図および各部の名称⑬のTONE(トーンボタン)の項(14項)をご参照ください。

メモリー方法

●番号順に作業してください。



注意

- ①同一トーン周波数局同士の交信はできますが、異なったトーン周波数の局との交信または、トーン運用機能のない無線機とのトーンスケルチ運用はできません。
- ②トーンスケルチ運用を行うときは、予めCTN111のトーン周波数を設定しておいてください。
- ③TONEボタンが押されたままになっていると、レピーター運用および通常運用しませんので、トーンスケルチ運用後はTONEボタンをもとに戻しておいてください。

1

周波数を記憶させる方法

記憶回路に任意の周波数10種類とオフセット周波数2の計12種類メモリーできます。またメモリーされた周波数の呼び出し、変更、消去、スキャンができます。

メモリーできる周波数は、1200MHz帯と430MHz帯合わせて10種類です。

メモリーされた場所をメモリーアドレス番号といい、メモリーアドレス番号を、M1、M2、M3……M0と表します。

手順

- ①1200/430のボタンを押しメモリーする周波数のバンドを決めます。
- ②RCLボタンを押し、メモリー呼び出し状態にします。現在表示されているメモリーアドレス番号右に▲が点滅または点灯します。
なお、SUBバンドでメモリーしたアドレス番号のときは、アドレス番号表示の下に、SUBが表示されます。

430MHz帯がメインバンドのとき、RCLを数回押すとアルファベットのAが表示され、1200MHz帯がメインバンドのときはbが表示されます。これは、レピーター運用R2のオフセット周波数を設定するメモリーアドレス番号です。

- ③メインダイヤルツマミ、MHzボタンで、メモリーする周波数に合わせます。
- ④ENTボタンを押すと、メモリーアドレス番号右の▲が点滅から点灯になり、メモリーされます。

例1 初期状態より、
メモリーアドレス番号1に
433.02MHzをメモリーする方法

- ①430MHz帯がメインバンドになっていることを確認します。

② RCLボタンを押し、メモリーアドレス番号1を呼び出します。

③ メインダイヤルつまみ、MHzボタンで、433.02 MHzにします。

④ ENTボタンを押すと、▲が点滅から点灯になりメモリー完了です。

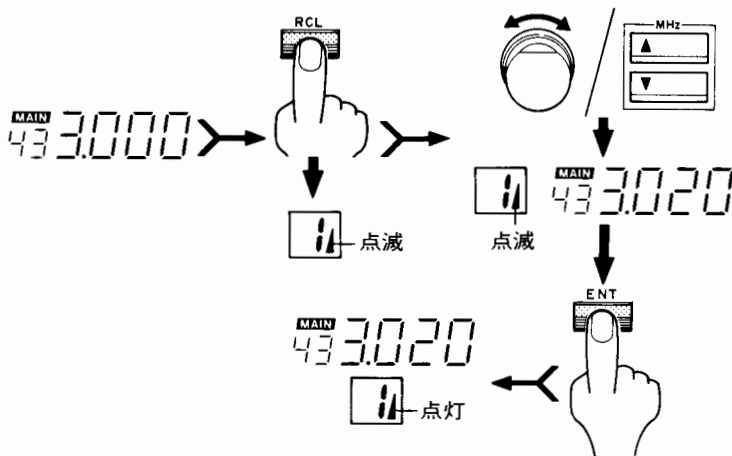
アドバイス

①メモリーアドレス番号 0～9 にメモリーされていないときは、▲が点滅し、メモリーされているときは、▲が点灯します。

②SUBバンドでメモリーされているときは、メモリーアドレス番号下に、SUBが表示されます。

●上記の方法でメモリーアドレス番号 2 0までメモリーしてください。

430MHz帯に
なっていることを
確認します。



例2

初期状態より、
メモリーアドレス番号 2に
1295.02MHzをメモリーする方法

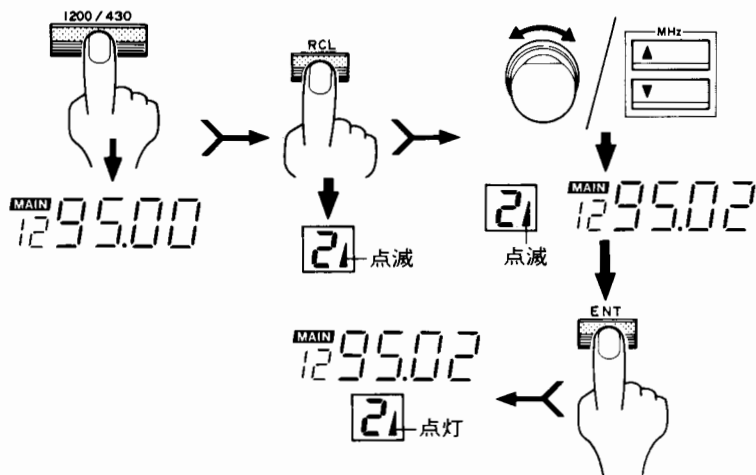
手順

① 1200/430ボタンを押し、1200MHz帯をメインバンドにします。

② RCLボタンを押し、メモリーアドレス番号2を呼び出します。

③ メインダイヤルつまみ、MHzボタンで、1295.02 MHzにします。

④ ENTボタンをおすと、▲が点滅から点灯に変わりメモリー完了です。



2

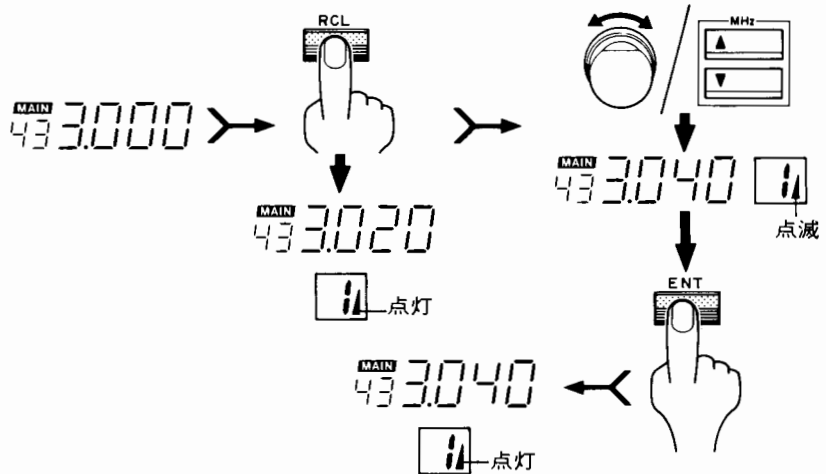
書き込まれているメモリー 周波数を変更する方法

記憶回路に一度メモリーした内容を自由に変えることができます。

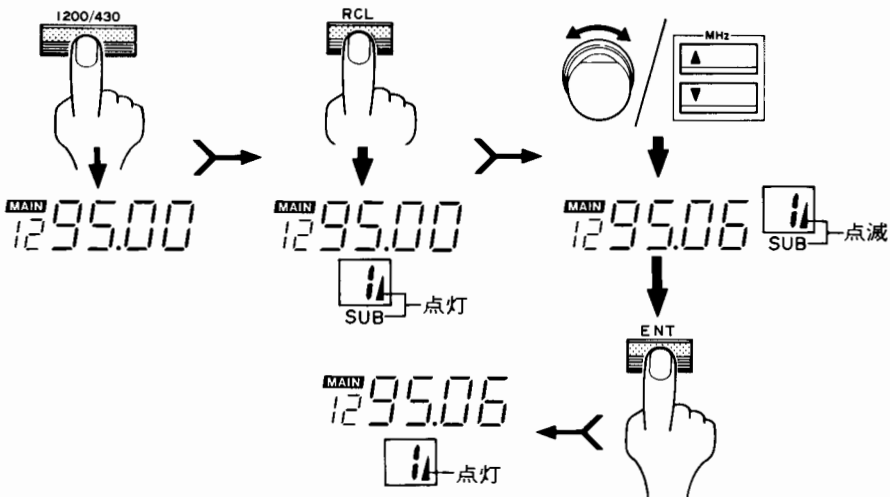
- ①RCLボタンで変更したいメモリーアドレス番号を呼び出し、MHzボタン、メインダイヤルツマミで新しい周波数に合わせてENTボタンを押すと、アドレス番号右の▲が点滅から点灯に変わり書き込みが完了します。

例1 1にメモリーされている433.02MHzを433.04MHzに変える方法

430MHz帯に
なっていることを
確認します。



例2 1にメモリーされている433.02MHzを1295.06MHzに変える方法



メモリー内容変更手順例

	MAINが表示されているバンド	アドレス番号の表示は	周波数を変えると		コメント
			メモリー呼び出し表示は	ENTボタンを押した時メモリーされるバンドは	
M1 1295.02	1200MHz帯の時		 点減	1200MHz帯の周波数に書き換えられます。	1200MHz帯の周波数表示が変わります。
	430MHz帯の時		 点減	430MHz帯の周波数に書き換えられます。	430MHz帯の周波数表示が変わります。
M2 433.12	1200MHz帯の時		 点減	1200MHz帯の周波数に書き換えられます。	1200MHz帯の周波数表示が変わります。
	430MHz帯の時		 点減	430MHz帯の周波数に書き換えられます。	430MHz帯の周波数表示が変わります。
M2 1295.04	1200MHz帯の時		 点減	1200MHz帯の周波数に書き換えられます。	1200MHz帯の周波数表示が変わります。
	430MHz帯の時		 点減	430MHz帯の周波数に書き換えられます。	430MHz帯の周波数表示が変わります。

3

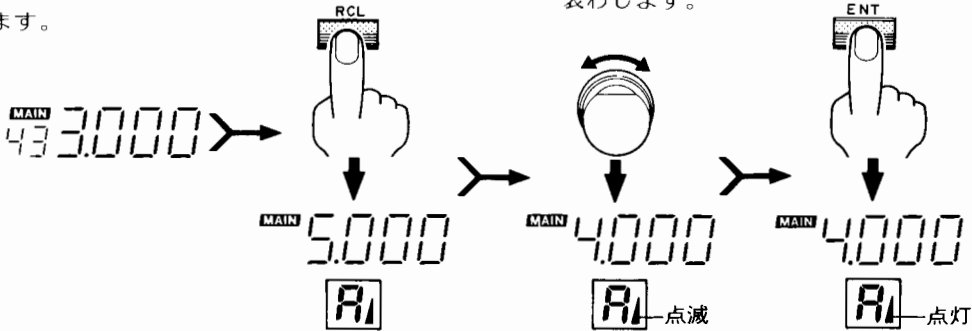
オフセット周波数のメモリー方法

R2ポジションでは、オフセット周波数を自由にかえてレピーター運用できます。

オフセット周波数の変更方法

手順 (430MHzの例)

①430MHz帯がメインバンドになっていることを確認します。



②RCLボタンを押し、メモリーアドレス番号Aを呼び出します。(初期値は、5MHzになっています)

③希望のオフセット周波数にします。
メモリー呼び出し状態を示す▲が点灯から点滅に変わります。

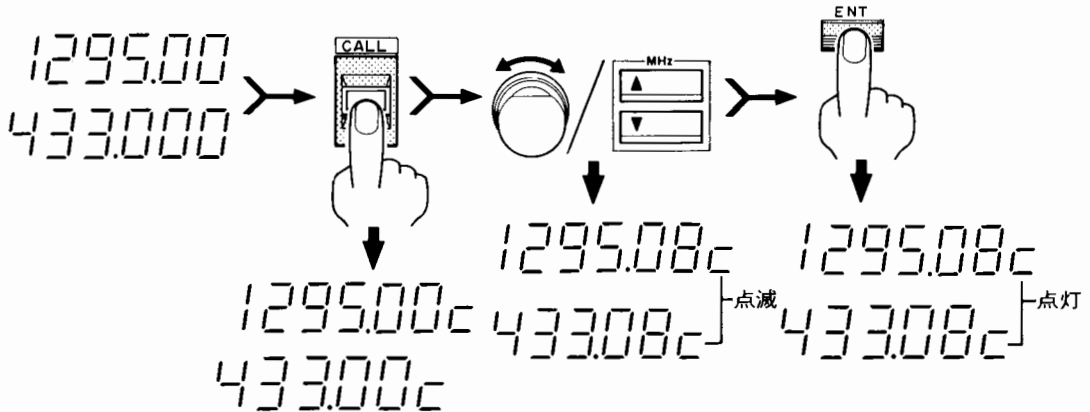
④ENTボタンを押すと、▲が点滅から点灯に変わり、新しいオフセット周波数がメモリーされたことを表わします。

4

CALL周波数の変更方法

CALLボタンを押すと、1200MHz帯は1295.00cが、430MHz帯は433.00cが表示されます。このCALLボタンを押したときの表示周波数を自由に変えることができます。

1200MHz帯と430MHz帯と同じ動作をします。



CALL周波数の変更方法

手順

①変更したいバンドにします。

②CALLボタンを押します。
(1200MHz帯がメインバンドのときは、1295.00cが
表示され、430MHz帯がメインバンドのときは、
433.00cが表示されます。)

③希望の周波数にします。
(CALL呼び出し中を表わすcが点灯から点滅に
変わります。)

④ENTボタンを押すと、cは点滅から点灯に変わり、
メモリーされたことを表わします。

メモリー周波数の消去方法

書き込まれているメモリー周波数を消去する方法

記憶回路に一度メモリーした内容を消すことができます。

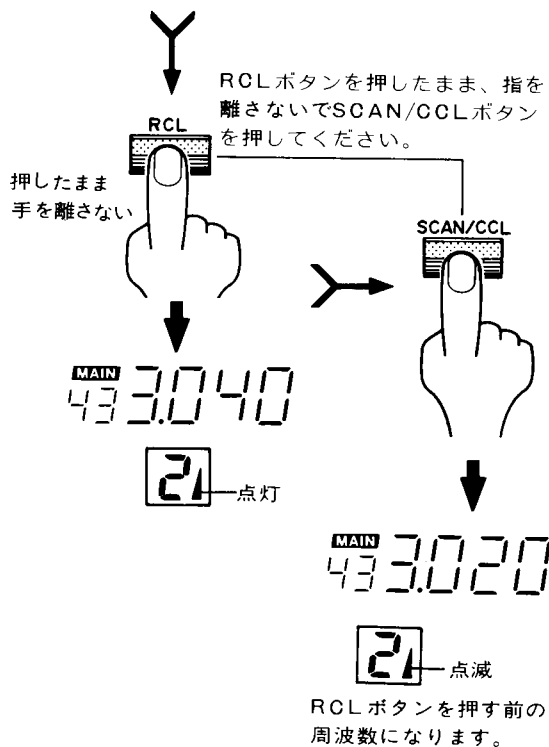
RCLボタンで消去したいメモリーアドレス番号を呼び出し、RCLボタンを押したままSCAN/CCLボタンを押すと、アドレス番号右の▲が点灯から点滅に変わり、メモリー呼び出し前の周波数を表示し、消去が完了します。

(但しSUBが表示されている時は、消去できません。)

手順

RCLボタンを押す前の周波数

MAIN
43 3020



SCAN動作について

C6000、C6000Sのスキャン動作は、1MHz内スキャン(メインバンドのみ)、メモリースキャン(メインバンドのみ)、1200MHz帯/430MHz帯両メモリースキャンがあります。

スキャン方式は、工場出荷時ポーズスキャン方式になっていますが、無線機本体内部を改造することにより、ビジースキャン方式にできます。

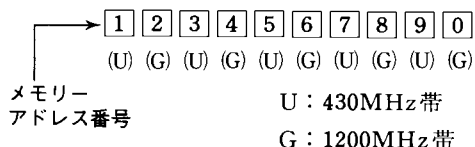
C6000、C6000Sはポーズスキャン方式を採用していますので、スキャン中に信号を受信すると、一時スキャンが停止し、5秒間経過すると受信していても再びスキャンを開始します。

① 1MHz内スキャン方法

ダイヤル周波数状態でSCAN/CCLボタンを押すと、1MHz内スキャン動作になります。チャンネルステップは10KHzまたは20KHzです。

② メモリースキャン方法

メモリーアドレス番号1～0までに下記バンドで周波数がメモリーされているとき、(a)(b)のようにメモリースキャン動作します。

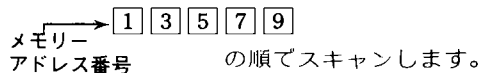


① メインバンドスキャンのとき

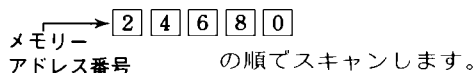
ダイヤル周波数状態でSCAN/CCLボタンを押した後に、RCLボタンを押すとメモリースキャン動作になります。

メモリースキャンはメモリーアドレス番号の低い方から高い方へ順番にスキャンします。メモリーされていないアドレス番号、バンドの異なるメモリーアドレス番号およびオフセット周波数用アドレス番号Aはスキップします。

(a)メインバンドが430MHz帯のとき



(b)メインバンドが1200MHz帯のとき

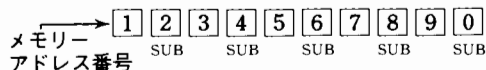


リチウム電池について

②1200MHz帯/430MHz帯両バンドスキャンのとき

ダイヤル周波数状態でSCAN/CCLボタンを押した後に、RCLボタンを押してメモリスキャン動作にし、1200/430ボタンを押すと両バンドメモリスキャンになります。メモリスキャンはメモリアドレス番号の低い方から高い方へ順番にスキャンします。

(a)メインバンドが430MHz帯になっているとき



の順でメモリーされているアドレス番号全てをスキャンします。

両バンドメモリスキャンの場合は、バンドの異なるメモリアドレス番号とSUB表示および周波数も表示されます。

本機には、マイコンのバックアップ電源として、リチウム電池を内蔵し、電源スイッチをOFFにしても記憶回路にメモリーされた内容を記憶しています。

使用頻度によっても異なりますがリチウム電池を一度交換すると、約5年間使用できます。

アドバイス

- リチウム電池が消耗してくると、電源スイッチをONにした時、表示部に周波数等が正しく表示されません。このような時は、お早目にリチウム電池を交換してください。
- リチウム電池を交換した時は、本機の裏面にある、リセットボタンを先の細い非金属棒で軽く押してください。(電源をONの状態で行ってください。)

注意

- 本機には、必ず専用のリチウム電池をお使いください。またリチウム電池の交換及び点検は、お買い上げいただいた販売店あるいは、弊社各営業所、弊社サービスセンターで行ってください。
- 使用後のリチウム電池は、火の中に絶対投げ捨てないでください。

フオンバンドについて

●1200MHz帯／430MHz帯使用区分

1200MHz帯／430MHz帯においては、下表に示されているバンド使用区分がJARL(日本アマチュア無線連盟)によって制定されていますので、この使用区分にそった運用をお願いいたします。運用の際には使用電波のルールや慣習に十分注意し無用のトラブルが生じないようにご配慮ください。

●JARL制定「アマチュア・バンド使用区分」 (昭和60年4月1日一部改正)

1. 電波型式の表示方法(定義)

- (1)A1電波は、「CW」とする。
- (2)A2、A3、A9(抑圧搬送波両側波帯に限る。)電波は、「AM」とする。
- (3)A3A、A3J、A3H電波は、「SSB」とする。
- (4)A5、A5C、A9(テレビ電波に限る。)及びA9C電波は、「TV」とする。
- (5)F1電波は、「RTTY(Ryと略記する。)」とする。
- (6)F2電波のうち、モールス符号を用いる電信によるものは、「FM」テレタイプによるものは「RTTY(Ryと略記する。)」とし、後者については使用区分表の脚注にその周波数帯を明示する。
- (7)F3電波は、「FM」とする。

- (8)F4電波のうち、占有周波数帯幅が40kHz以下のものは「FAX(Fxと略記する。)」とする。但し、FM系によるものについては使用区分表の脚注にその周波数帯を明示する。
- (9)F5電波のうち、占有周波数帯幅が40kHz以下のものは「SSTV(Svと略記する。)」とする。但し、FM系によるものについては使用区分表の脚注にその周波数帯を明示する。
- (10)上記の電波にその他の電波を加えたものを、「全電波型式」とする。

2. ()内の電波型式

使用区分のうち、()内の電波型式については、これと併記された電波型式による通信に混信を与えないことが明らかな場合に限り使用できるものとする。

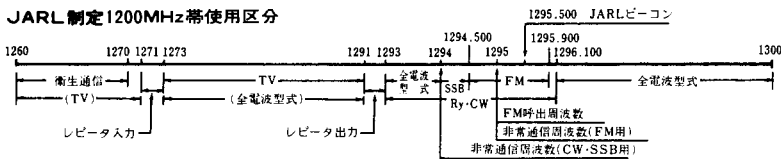
3. 表示周波数

- (1)非常通信、ビーコン、FM呼出、及び近距離小電力移動相互用の各表示周波数は、搬送波周波数とする。
- (2)1)以外の表示周波数は、電波の使用区分の境界を表わしており、電波の占有周波数帯幅の上限または下限とする。

4. FM呼出周波数における非常通信

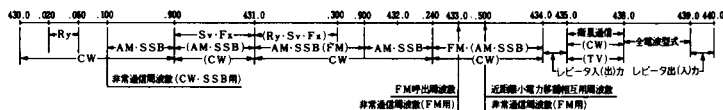
連絡設定後は他の周波数に移り非常通信を行なうこととする

JARL制定1200MHz帯使用区分



- (注1) 1295.900MHz～1296.100MHzの周波数帯は、月面反射通信、流星散乱通信、オーロラ反射通信などに使用する。
 (注2) 1293.000MHz～1294.000MHz及び1296.100MHz～1300.000MHzの各周波数帯の全電波型式には、パルス変調系の電波は含まないものとする。
 (注3) レビータ用入出力周波数帯の入出力周波数は、別に定める。

JARL制定430MHz帯使用区分



- (注1) 431.900MHz～432.240MHzの周波数帯は、月面反射通信、流星散乱通信、オーロラ反射通信などに使用する。
 (注2) 431.000MHz～431.900MHz及び432.240MHz～434.500MHzの各周波数帯のFM電波の占有周波数帯幅は、16kHz以下とする。
 (注3) レビータ用入出力周波数帯の入出力周波数は、別に定める。
 (注4) FM系によるRTTY、SSTV及びFAXの運用は、431.000MHz～431.300MHz及び全電波型式の周波数帯を使用する。

故障とお考えになる前に

サービスを依頼されるまえに、ご面倒ですが、次のことをご確認ください。

下記の項目をチェックしてなおらない場合は、お買い上げになった販売店、お近くの弊社各営業所、または弊社サービスセンターにご相談ください。

電源が入らない

ヒューズが切れていませんか。

C6000、C6000Sには8Aのヒューズを入れてください。

注意：定格以上のヒューズは絶対使用しないでください、故障の原因になります。

電源ケーブルが正しく接続されていますか。

赤色が⊕、黒色が⊖です。正しく接続してください。

接続を間違えると電源が入らないばかりか故障の原因にもなります。

注意：アンテナアースと電源アースを共通にすると、接触不良およびノイズ発生の原因になりますので、おやめください。

周波数表示が正しく表示されない。

リチウム電池を交換したとき、マイコンが誤動作したときになります。

リチウム電池を交換したときおよび、マイコンが誤動作したときは、非金属性の先の細いもので、本機裏面のリセットボタンを軽く押し、マイコンをリセットしてください。

(リセットボタンを押すときは、本機の電源スイッチをONにしておいてください)

電源スイッチをON OFFする毎に、周波数表示がおかしくなる。

リチウム電池は、マイコンバックアップ用です。

リチウム電池が消耗するとマイコンをバックアップすることができず、電源スイッチをON OFFする毎に、周波数表示がおかしくなります。**リチウム電池を交換してください。**

リチウム電池は、当社指定のリチウム電池を必ずご使用ください。

信号を受信しない。

スケルチツマミが時計方向に回し切っていると、弱い信号を受信できません。スケルチツマミを正しい位置に戻してください。

1200MHz帯と430MHz帯の音量調節ツマミとスケルチツマミを間違えていませんか。C6000、C6000Sは、独立した音量調節ツマミとスケルチツマミになっています。

430MHz帯の音量調節ツマミおよびスケルチツマミは上側です。

1200MHz帯の音量調節ツマミおよびスケルチツマミは下側です。

表示部にMUTEが表示されていませんか。

MUTE表示されているバンドの音量は、もう一方のバンドに信号が加わると自動的に音量が小さくなります。

MUTE ボタンを押し MUTE 動作を解除してください。

トーンスケルチ動作になっていませんか。

トーンスケルチ動作のとき、通常運用局との交信ができませんのでTONEボタンを押し、トーンスケルチ動作を解除してください。

音量調節ツマミが反時計方向に回し切ってありませんか。

音量調節ツマミを時計方向に回し適当な音量に調節してください。

周波数が434.99MHz(10KHzステップのとき)から430.00MHzに戻ってしまう。

RVS表示の右に◀が表示されていませんか。

RVSボタンを押し、RVS動作を解除してください。

強い信号しか受信しない。

1200MHz帯と430MHz帯のアンテナは、正しく接続されていますか。

1200MHz帯は上側です。

430MHz帯は下側です。

スケルチツマミが時計方向に回し切っていると、弱い信号を受信できません。

スケルチツマミを正しい位置に戻してください。

送信しない。

表示部のMAIN表示は、希望するバンドになっていますか。

R1またはR2の右側に◀の表示がありませんか。オフバンドでは、PTTボタンを押しても送信状態になりませんので、正しく周波数を再設定してください。または、R1、R2ボタンを押してレピーターモードを解除してください。

A▲(b▲)オフセット周波数(メモリー呼び出し状態)が表示されていませんか。

A▲(b▲)が表示されているときは送信状態になりませんのでSCAN/CCLボタンを押してメモリー呼び出し状態を解除してください。

レピーター局をアクセスできない。

(88.5Hzのトーン周波数が送信されない)

TONEボタンが押されていませんか。

TONEボタンが押されている場合は、トーンスケルチ運用になります。TONEボタンを押し、トーンスケルチ運用を解除してください。

レピーター局サービスエリアを越えていませんか。

ブザー音がしない。

音量調節ツマミが反時計方向に回し切ってありませんか。

音量調節ツマミでブザー音が調節できます。

照明が暗い。

DIMMボタンが押されていませんか。

DIMMボタンを押すと、大型LCDディスプレイの照明を2段階に変えることができます。

DIMMボタンを押してください。

マイクロホンの*ボタンでバンド切り換えができない。

別売品のAQSオプションを接続してご使用のときは、マイクロホン内部のスイッチを切り換えて*ボタンをCAC(チャンネルアクセスコール)として使用します。

*ボタンをバンド切り換えとして使用するときは、マイクロホン内部のスイッチを元に戻してください。

保証・アフターサービスについて

1. この商品には保証書を別途添付してあります。

保証書は「販売店印・保証期間」をご確認のうえ、販売店からお受け取りいただき、よくお読みの上大切に保存してください。

2. 保証期間はお買上げ日より1年間です。

正常なご使用状態で、この期間内に万一故障の節は、お買上げ販売店または弊社営業所で保証書記載事項に基づき、「無償修理」いたします。

3. 保証期間経過後の修理

修理によって機能が維持できる場合は、お客様のご要望により有料修理致します。

4. 補修用部品の詳細・ご転居等アフターサービスについて

の不明な点は、お買上げ販売店または別紙の弊社営業所に遠慮なくご相談ください。

定格

指定無き項目は、430MHz帯、1200MHz帯共通定格です。

① 一般仕様	送受信周波数	430MHz帯	430.000～439.990MHz
		1200MHz帯	1260.00～1299.99MHz
	電波型式	F3、F2(AQSオプション使用時)	
	周波数安定度	430MHz帯	±10PPm(−20°C～+60°C)
		1200MHz帯	±5PPm(−20°C～+60°C)
	定格電圧	DC13.8V ±15%	
	消費電流	430MHz帯 (C6000)	送信時 (HI) 3.4A
			(LOW) 1.5A
		(C6000S)	(HI) 8.0A
			(LOW) 4.0A
		1200MHz帯 (C6000、C6000S)	送信時 (HI) 4.5A
			(LOW) 2.2A
			待受受信時 900mA
	マイクロホンインピーダンス	600Ω	
	低周波出力インピーダンス	4Ω	
	空中線インピーダンス	50Ω	
	使用温度範囲	−20°C～+60°C	
	アンテナコネクタ	N型(ケーブル付)	
	接地方式	マイナス接地	
	寸法(幅×高さ×奥行き)	155×55×207mm	
	重量	約1.8kg	

② 受信	受信方式	430MHz帯	ダブルスーパーヘテロダイン方式
		1200MHz帯	トリプルスーパーヘテロダイン方式
	中間周波数	430MHz帯	1st IF 21.8MHz (Upper)
			2nd IF 455 KHz (Lower)
		1200MHz帯	1st IF 157.0MHz (Lower)
			2nd IF 45.0MHz (Lower)
			3rd IF 455KHz (Upper)
	受信感度(12dB SINAD)	−16dBμ(0.158μV) (JAIA測定法による値)	
	選択度	12KHz以上(−6dB)	
		24KHz以下(−60dB)	
	スケルチ開放感度	−22dBμ(0.08μV) (JAIA測定法による値)	
	低周波出力	3W(10%歪時)	
	0.5μV入力時S/N比	30dB以上	
	R1T可変範囲(1200MHz帯)	±7.5KHz以上	

③ 送信	送信出力	C6000	HI 10W LOW 1W
		C6000S	430MHz帯 HI 25W LOW 5W
			1200MHz帯 HI 10W LOW 1W
	変調方式	リアクタンス変調	
	スプリアス発射強度	1200MHz帯	HI −50dB
			LOW −40dB
		430MHz帯	HI −60dB
			LOW −60dB
	変調歪	3%以下(70%変調時)	

●本機の規格および外観は改良のため予告なく変更することがありますのでご了承ください

申請書の書き方

本機によるアマチュア無線局の申請には、市販の申請書に下記事項を記入し、間違いのないことを確認して申請してください。

■ C6000 (1) [工事設計書] AQS オプションを使用しない場合

区 分		第 1 送 信 機	第 2 送 信 機
発射可能な電波の型式 周波数の範囲		F3 1200MHz帯 430MHz帯	
変調の方式		リアクタンス変調	
終 段 管	名 称 個 数	1200MHz帯 M57762×1 430MHz帯 M57752×1	
	電 圧 入 力	1200MHz帯 12.5V 45W 430MHz帯 13.2V 22W	
送信空中線の型式			
その他工事設計		電波法第3章に規定する条件に合致している	

(2) [工事設計書] AQS オプションを使用する場合

区 分		第 1 送 信 機	第 2 送 信 機
発射可能な電波の型式 周波数の範囲		F3、F2 1200MHz帯 430MHz帯	
変調の方式		リアクタンス変調	
終 段 管	名 称 個 数	1200MHz帯 M57762×1 430MHz帯 M57752×1	
	電 圧 入 力	1200MHz帯 12.5V 45W 430MHz帯 13.2V 22W	
送信空中線の型式			
その他工事設計		電波法第3章に規定する条件に合致している	

- C6000はJARL登録機種ですので、送信機系統図の記入を省略することができます。
送信機系統図の欄にはC6000とご記入ください。
- 登録番号 C6000 S45

第 1 送信機系統図

- 送信機型名 C6000
S45

■ C6000S (1) [工事設計書] AQS オプションを使用しない場合

区 分		第 1 送 信 機	第 2 送 信 機
発射可能な電波の型式 周波数帯の範囲		F3、 使用時 1200MHz帯 430MHz帯	
変調の方式		リアクタンス変調	
終 段 管	名 称 個 数	1200MHz帯 M57762×1 430MHz帯 M57729×1	
	電 圧 入 力	1200MHz帯 12.5V 45W 430MHz帯 13.0V 50W	
送信空中線の型式			
その他工事設計		電波法第3章に規定する条件に合致している	

(2) [工事設計書] AQS オプションを使用する場合

区 分		第 1 送 信 機	第 2 送 信 機
発射可能な電波の型式 周波数帯の範囲		F3、F2 使用時 1200MHz帯 430MHz帯	
変調の方式		リアクタンス変調	
終 段 管	名 称 個 数	1200MHz帯 M57762×1 430MHz帯 M57729×1	
	電 圧 入 力	1200MHz帯 12.5V 45W 430MHz帯 13.0V 50W	
送信空中線の型式			
その他工事設計		電波法第3章に規定する条件に合致している	

- C6000SはJARL登録機種ですので、送信機系統図の記入を省略することができます。
送信機系統図の欄にはC6000Sとご記入ください。

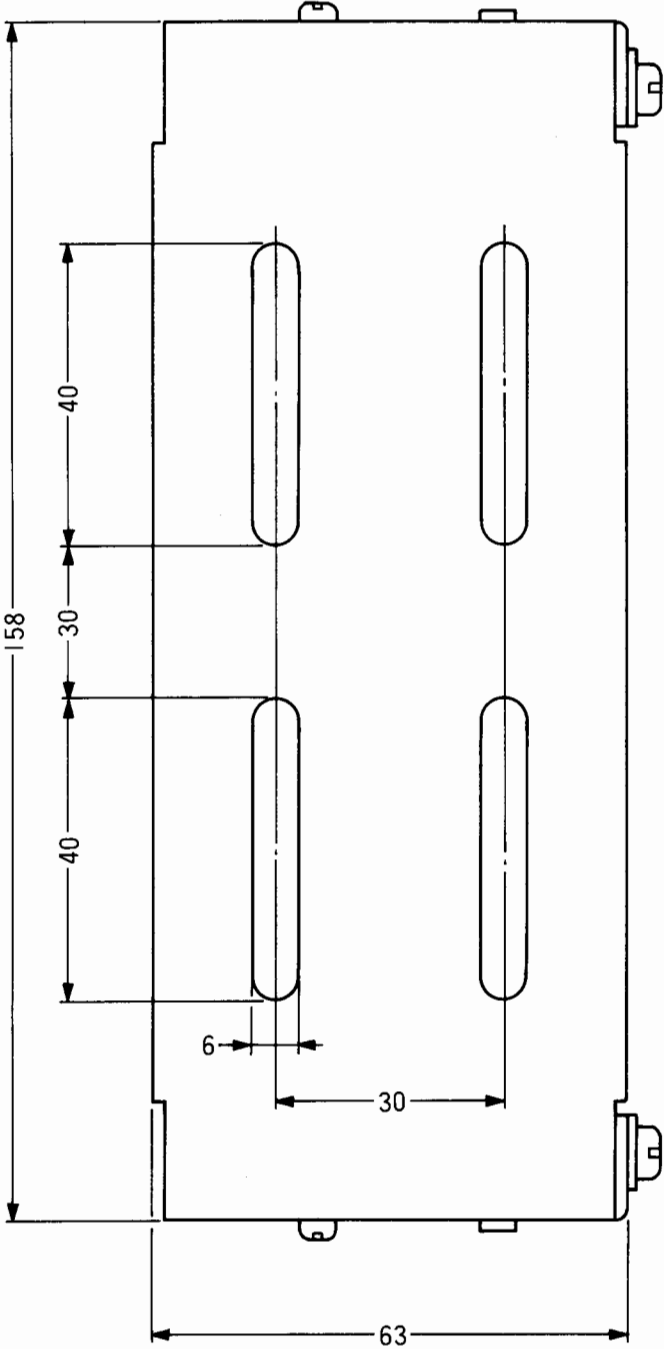
●注意：C6000Sは25Wモデルですので、第2級アマチュア無線技士以上の資格が必要です。

- 登録番号 C6000S S46M

第1送信機系統図

- 送信機型名 C6000S
S46M

モバイルブラケット取付け穴加工型紙



日本マランツ株式会社

本 社 〒228 神奈川県相模原市相模大野7丁目35番1号
営業本部 〒150 東京都渋谷区恵比寿南1丁目11番9号

ご注意：お問合せは日本マランツ(株)各営業所で承っております
ので全国営業所一覧をご覧ください。